

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハチ目ハキリバチ科

キバラハキリバチ

Megachile xanthothrix Yasumatsu et Hirashima, 1964

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者): 皆木宏明



選定理由

典型的な海浜性のハナバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系の喪失で、生息密度がきわめて低い。

概要

体長はメスが16-17mm、オスが15-16mm。大型のハキリバチである。胸・腹部の背面が橙黄色ないし黄褐色の毛で覆われている。希種のため、生態的知見がきわめて乏しい。年1化性で、活動期間は夏から初秋である。最近の大社砂丘での調査によると、初見日はオスが7月上旬、メスが7月下旬であった。広食性であるが、花粉を採集できる花資源は大型のマメ科植物に限定される。海浜では、ハマナタマメが主花資源植物と目される。山陰の海浜ではこの植物の生育はまれで、これが原因で生息密度が極端に低いのかも知れない。営巣は砂地に穿孔して行われるほか、アナバチの1種の放棄巣や野ネズミの旧坑なども利用する。アナバチの1種の細い旧坑を利用した巣では、巣の構造は筒類営巣性のハキリバチ類のそれと類似している。すなわち、複数の育房が直列に連

続的に配置される。また、ほかのハキリバチ類と同様に、育房のキャップは卵形葉片で、育房栓と入口栓はいずれも円形葉片で閉鎖される。越冬態は前蛹である。国内では、西南日本と関東地方においていずれも少数個体が採集されている。最近、温暖化の影響で東北地方の仙台でも生息が報告されている。国外では、中国北東部と韓国で分布が記録されている。

県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)のほか島根県内の数カ所の砂丘、内陸部でも砂丘地のような砂地がある木次町ふるさと尺の内公園で採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

特記事項

内陸でも河川敷で営巣が見られる。ここでは、クズが花資源植物として利用される。

(執筆: 前田 泰生)

参考文献

郷近勝夫・前田泰生(2020) キバラハキリバチの宮城県と島根県からの採集記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 281-282.
岩田久二雄(1941) 日本内地産葉切蜂六種の習性考察, 高津中学校編「紀元2600年記念高津中学校記念論文集」: 223-248.
林 成多・片岡大輔・大谷隆起(2023) 島根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園隣接の裸地試験区における昆虫類調査(2012年)。ホシザキグリーン財団研究報告, (26): 65-82.
前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一(2004) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究。ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 275-303.
宮永龍一・清水加那子・井上くるみ(2022) 海浜性植物ハマゴウの訪花ハナバチ相と周辺環境との関係について。中国昆虫, (35): 1-9.

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目カワトンボ科

アオハダトンボ

Calopteryx japonica Selys, 1869

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者): 北山拓



選定理由

水生植物が豊かで砂地の河川中流域を中心に生息しており、河川改修等による環境変化や水質悪化に弱い。

概要

全長55-63mm。ハグロトンボによく似るが、成熟したオスでは翅が青藍色に輝き、また腹部第9、10節の腹面が白色である。オスは縁紋を持たないが、メスは翅に白色の偽縁紋を持つ。羽化時期はハグロトンボより約1カ月早く5月中旬ごろから始まる。最盛期は6月で8月上旬まで見られる。本種はメスへの求愛行動が特異で、オスは飛びながら腹面末端の白色部を誇示し、ときに流水面に浮かんで流されるような行動をとる。産卵はメス単独で水中植物に行うが、しばしば潜水産卵に移行する。朝鮮半島から中国東北部、東シベリアに分布し、国内では本州および九州の各地に分布する。

県内での生息地域・生息環境

流域の比較的大きな河川の中流域を中心に広く分布するが、生息河川はかなり限定される。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

生息地流域の開発等による水質悪化や、河川改修等による河川植生環境の消失。

(執筆: 北山 拓)

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目イトトンボ科

オオイトトンボ

Paracercion sieboldii (Selys, 1876)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

過去の記録によれば、県全域に広く分布していたことがうかがえるが近年産地が激減している。特に西日本での生息地・個体数の急激な減少傾向が指摘されており、絶滅したとされる県もある。

概要

全長30—40mm。盛夏以降に出現する個体は小型である。オスは成熟すると青色の斑紋になり、メスでは黄緑色となるが、オスと同じ青色の個体も出現。同属のムスジイトトンボやセスジイトトンボとは、同所的に生息する上に酷似する。産卵は連結して水面近くの植物に行うが、潜水産卵も珍しくない。

参考文献

宮本詔子 (2024) オオイトトンボの記録。益田市。すかしば, 71:62.
大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36.
大浜祥治 (2009) 隠岐・島前のトンボ追加記録。すかしば, 57:37-44.
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相 V。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

県内での生息地域・生息環境

県内の平地から山地まで広く記録されており、特に隠岐諸島では同属のセスジイトトンボが分布しないため比較的産していた。抽水植物や浮葉植物の繁茂する池沼や湿地に生息するが、同属の4種の中ではもっとも自然度の高い水域を好む傾向にある。

存続を脅かす原因

開発等による水域の消失や水質の悪化。

(執筆者:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目イトトンボ科

ムスジイトトンボ

Paracercion melanotum (Selys, 1876)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内での記録が非常に少なく、また一時的に多産しても、安定的・継続的に生息が確認できる生息地がない。

概要

全長30—39mmの中型のイトトンボ。同属のセスジイトトンボやオオイトトンボとは混生するうえ形態が酷似するため、同定に注意を要するグループの一つ。オスでは同属他種に比べ眼後紋が小さく、複眼や体色の青みが強いが、確実な同定には尾部付属器による確認が必要。メスでは前胸後縁の中央部がへこむことなどで識別できる。南方系の種で日本海側では産地が限定される。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
大浜祥治 (2001) 神戸川でムスジイトトンボを発見。すかしば, 49:28.
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相 V。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.
淀江賢一郎 (1988) 隠岐諸島のトンボ・メモ(4)。中国昆虫, 2:14.

県内での生息地域・生息環境

隠岐(島後)を含む県内沿岸部の数カ所から記録されている。平地の植生豊かで比較的大きな池沼、河川の河口域などがおもな生息環境。中海に面している鳥取県米子市の水鳥公園周辺は本種の多産地で知られるが、距離的に近い飯梨川河口周辺でも確認されている。

存続を脅かす原因

開発等による生息水域の消失や水質悪化。

(執筆者:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目イトトンボ科

ホソミイトトンボ

Aciagrion migratum (Selys, 1876)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):北山拓

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内での分布が局限され、安定した生息地は少ない。

概要

著しく細身の中型のイトトンボ。本種は秋に羽化し、越冬後翌春に成熟する越冬型と、初夏に羽化し直ちに成熟する夏型の2タイプが知られる。全長は越冬型で33-37mm、夏型で29-33mm。未熟な個体は、オス、メスとも淡褐色であるが、成熟すると越冬型の方が、体色の青みがより鮮やかになる。産卵はオス、メス連結して植物組織内に行くのがよく観察され、潜水産卵も見られる。台湾、朝鮮半島から中国中部にかけて分布し、国内では関東・北陸地方以南に分布している。本種は南方系の種であり、近年は太平洋側で急速に分布北限が北上している。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116。
 宮本詔子 (2025) 益田市におけるホソミイトトンボの春型夏型。すかしば, 72:16。
 大浜祥治 (1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば, 26:1-4。
 大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290。

県内での生息地域・生息環境

平地から山間部まで広く分布するが産地は局地的。植生豊かで日当たりのよい池沼や水田等に生息。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

圃場整備や池沼の埋め立てによる生息地の消失。水田への農業散布。(執筆:北山 拓)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目ムカシトンボ科

ムカシトンボ

Epiophlebia superstes (Selys, 1889)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):北山拓

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

河床の安定した山間部の溪流に生息するが、分布は局地的である。かつて比較的多産した隠岐・島後では近年個体数の減少が顕著である。

概要

全長45-56mm。中生代に栄えた古代トンボの1群で、現生種は日本特産種である本種と、ヒマラヤ山地に生息するヒマラヤムカシトンボの2種のみ知られていたが、最近になって中国北東部から第3の種が報告されている。複眼が離れるなど体形はサナエトンボ科に似るが、翅はアイトトンボ科に似るといふ特異な形態をしている。幼虫期間はきわめて長く、6、7年に及ぶと言われている。おもに4月下旬から5月にかけて溪流周辺を敏捷に飛翔する。産卵はメスが単独でフキ、ワサビ、コケ類などの生体組織内に行く。成虫の出現期間が短いため、生息確認には幼虫採集による分布調査が有効。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116。
 大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36。
 大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290。
 山陰むしの会 (1993) 「山陰のトンボ」, 208pp.山陰中央新報社。

県内での生息地域・生息環境

中国山地沿いの源流域を中心に、島根半島部や離島である隠岐(島後)にも分布している。

存続を脅かす原因

林道やダム建設等、山間開発による溪流への土砂流入や水系の分断。(執筆:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目ヤンマ科

サラサヤンマ

Sarasaeschna pryeri (Martin, 1909)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):北山拓



選定理由

周辺を樹林で囲まれた湿地や放棄水田などに生息するが、適した生息環境を満たす産地は限られている。

概要

全長57–68mm。黒地に黄色から緑色の斑紋を持つ小型のヤンマ。樹林に囲まれた丘陵地の湿地や休耕地に生息する。4月下旬ごろから羽化が始まり、未熟成虫は林間の開けた場所を高く飛びながら摂食飛行を行う。成熟したオスは木陰のある湿地や放棄水田でホバリングを交えながら縄張り飛行を行い、メスの飛来を待つ。産卵は朽木や湿った土、落ち葉などに行う。北海道、本州、四国、九州に分布するが、産地の減少している地域もある。日本特産種。

参考文献

樋野耕一 (2017) 出雲市周辺における2016年ヤンマ採集記。すかしば, (64): 49-54.
 樋野耕一 (2022) 安来市佐久保湿地でアオヤンマとキイロヤマトンボを採集。すかしば, (69): 69.
 大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, (50): 1-36.
 大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相 V。ホシザキグリーン財団研究報告, (6): 215-290.

県内での生息地域・生息環境

県内全域の平野部から山間部まで広く分布する。植生遷移の進んだ放棄水田などの特殊な湿地環境を好むため、産地は限られる。隠岐（島後）にも分布する。

存続を脅かす原因

湿地や放棄水田の乾燥化、植生遷移の進行、開発による生息場所の消失。成虫の休息場所となる林の消失。

(執筆: 樋野 耕一)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目ヤンマ科

カトリヤンマ

Gynacantha japonica Bartenev, 1909

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):北山拓



選定理由

圃場整備による水田の乾燥化や山裾の水田の放棄荒廃により、近年減少傾向が著しい。

概要

全長66–77mm。複眼が大きく腹部がほっそりとした中型のヤンマ。腹部背面の第2節の色は、成熟オスでは鮮やかな水色、メスでは緑色の斑紋となる。羽化は7月上旬ごろから始まり、成虫は秋遅く11月下旬ころまで見られる。黄昏活動性が強く、日没前後に活発に摂食する。ヤンマ科の他の種よりも特に暗い時間帯、場所を好み、人間の視界が効かなくなっても飛んでいることがある。和名は蚊を食べることに因んでいるが、顎が小さい割にはウシアブやガなど、大きな餌を食べるところもよく見られる。産卵はメス単独で水田の湿土や朽木などに行う。国外では中国中部、北部から朝鮮半島に分布し、国内では北海道南部から九州まで広く分布する。

参考文献

樋野耕一 (2017) 出雲市周辺における2016年ヤンマ採集記。すかしば, (64): 49-54.
 北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
 大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50: 1-36.
 大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相 V。ホシザキグリーン財団研究報告, 6: 215-290.

県内での生息地域・生息環境

かつては平野部から低山地にかけての林縁の水田で普通に見られたが、圃場整備による水田の乾燥化や草原化、水田への農薬散布により近年急速に生息状況が悪化している。隠岐の島後や、島前の知夫里島にも記録がある。

存続を脅かす原因

圃場整備等による水田や湿地の乾燥化。水田への農薬散布。成虫の休息場所となる林の伐採。

(執筆: 北山 拓)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目ヤンマ科

ルリボシヤンマ

Aeshna juncea (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

おもに中国山地沿いの湿地や比較的小規模な池沼に生息するが分布は局地的である。近年の温暖化傾向により、平野部における産地の消失が懸念される。

概要

全長68—90mm。オオルリボシヤンマに似た大型のヤンマである。7月中旬ごろから羽化、成虫は10月中旬頃まで見られる。成熟した成虫は、気温が下がり始める8月下旬ごろから水域に現れ、オスはホバリングをしばしば交えて縄張り飛翔を行い、メスは単独で水面付近の植物組織内や湿土に産卵する。北半球北部一帯に分布し、国内では北海道、本州、四国に分布。西南日本では産地に限られる。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
野津幸夫 (1995) 枕木山のトンボの記録。すかしば, 41/42:54.
大浜祥治 (1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば, 26:1-4.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

県内での生息地域・生息環境

おもに中国山地沿いの湿地や休耕田、小規模で挺水植物の豊富な池沼で見られる。島根半島部や益田市周辺、大田市石見銀山周辺など標高の低い平野部での記録もあるが非常にまれ。隠岐諸島では未記録である。

存続を脅かす原因

造成や残土処理等による生息地の埋め立て。成虫の休息場所となる森林の伐採。

(執筆者:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目サナエトンボ科

ヒメサナエ

Sinogomphus flavolimbatus (Matsumura in Oguma, 1926)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

流域全体の環境が良好に保たれている大きな河川の上流域に限って分布する。

概要

全長41—47mm。河川上流域を中心に生息する華奢な体形のサナエトンボ。体形がよく似たオジロサナエとしばしば混生するが側胸の斑紋等で識別は容易。幼虫は河川中下流域まで流下することが多く、そこで羽化した成虫は上流域に移動しながら成熟するという。6月に羽化が始まり7月中旬には溪流の石の上で縄張りを張るオスが多数見られる。産卵はメスが単独で、流れの緩い岸辺に現れ打水産卵を行う。日本特産種。

参考文献

樋野耕一 (2017) 龍頭が滝でヒメサナエを採集。すかしば, (64): 8.
森山 孝 (2021) 八重滝でヒメサナエを撮影。すかしば, (68): 33.
大浜祥治 (1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば, (26):1-4.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, (6):215-290.

県内での生息地域・生息環境

比較的流域の大きな河川の上流域で見られる。高津川水系匹見川の上流域で多産する記録がある他、斐伊川水系三刀屋川上流部の支流河川でも見られる。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

林道工事等山間部開発に伴う木々の伐採や溪流への土砂流入。ダム設置による溪流環境の消失や水系の分断。

(執筆者:樋野 耕一)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目サナエトンボ科

タベサナエ

Trigomphus citimus (Needham, 1931)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

分布が限られるが、特に県東部ではまれで、絶滅した産地も少なくない。

概要

全長43–47mmの比較的小型のサナエトンボ。県内に分布するコサナエ属3種(本種、コサナエ、オグマサナエ)はお互い酷似し、また混生も見られるため、成虫の同定には注意を要する。ただし本種幼虫は、同属他種に比べ背棘・側棘が明瞭であり、また腹部先端が円筒形にならず、区別は容易である。県内平野部では4月上旬から羽化が始まり6月まで記録がある。コサナエ属中で本種のみが日本特産種でなく、朝鮮半島から中国東北部にかけて別亜種が分布する。

参考文献

樋野耕一(2018) 2017年に記録した出雲地方のトンボ。すかしば, 65: 5-10.
宮本詔子(2024) 益田市と近隣におけるコサナエ属の記録。すかしば, 71:73-75.
大浜祥治(1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば, 26:1-4.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を除く県全域に分布するが、東部では産地が局限される。平野部を中心に、緩やかな流れの浅い小川に生息するが、溜池など止水的環境にも適応している。

存続を脅かす原因

小規模な流れのコンクリート水路化。生息地の植生環境の消失。
(執筆者: 大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目サナエトンボ科

キイロサナエ

Asiagomphus pryeri (Selys, 1883)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):北山拓



選定理由

平地や丘陵地の緩やかな流れの砂泥河川に生息するため、分布が限られる。

概要

全長60–69mmの大型のトンボ。ヤマサナエに似るが、オスでは尾部上付属器の先端が斜めに断ち切れ下部付属器よりも短いこと、メスでは産卵弁が長く突出することで識別可能。羽化は5月中旬ごろから行われ、主に午前中に見られる。未熟個体は生息地周辺の林内で過ごした後、水域に戻ってくる。オスは河川の石や植物に静止し縄張りを占有する。日本特産種で関東以南の本州、四国、九州に分布するが、産地は限られ、全国的に減少している。

参考文献

樋野耕一(2017) 2016年に出雲市で採集したキイロサナエの記録。すかしば, (64): 56.
樋野耕一(2018) 2017年に記録した出雲地方のトンボ。すかしば, (65): 5-10.
北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (22), 1-116.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, (6):215-290.

県内での生息地域・生息環境

県内での記録は、東部に比較的多く、中・西部では少ない。隠岐諸島では未記録。おもな生息環境は砂泥河川の中下流域である。

存続を脅かす原因

河川改修等による河川環境の変化。未熟期間を過ごす河川周辺の林の消失。
(執筆者: 樋野 耕一)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目ムカシヤンマ科

ムカシヤンマ

Tanypteryx pryeri (Selys, 1889)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

幼虫の生息環境が特殊であるため分布が広がりにくい。既存の生息地は少なく、個体数も減少傾向にある。

概要

全長63–80mmのやや大型のトンボ。頭部が比較的小さく複眼が離れており、一見サナエトンボのように見えるが、腹部の斑紋が特異で縁紋もサナエトンボより長い。羽化は5月上旬ごろに始まり、成虫は7月下旬まで見られる。大型のトンボのわりに動作が緩慢である。木立の幹や地面および低木の葉上などに体を密着させて止まることが多い。産卵はメス単独で湿った柔らかい泥やコケの間に行く。幼虫は湿った土やコケの間にトンネルを掘って生活している。日本特産種で本州、九州に分布しているが、四国には分布しない。

参考文献

樋野耕一 (2018) 2017年に記録した出雲地方のトンボ。すかしば, (65): 5-10.
 北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (22), 1-116.
 祖田 周 (1988) 安来市周辺のトンボ相-スライド目録1979~'87-。すかしば,(29):17-22.

県内での生息地域・生息環境

低山地から山間部にかけて広く分布するが、産地は限られる。幼虫は山の斜面で水のしたたり落ちるような特殊な環境に生息する。安来市周辺では比較的多く、島根半島部にも記録があるが、隠岐諸島では記録がない。

存続を脅かす原因

林道建設等開発による生息湿地の消失。成虫の休息場所となる山林の伐採。

(執筆: 樋野 耕一)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目エゾトンボ科

エゾトンボ

Somatochlora viridiaenea (Uhler, 1858)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

かつては休耕田等の増加に伴い、一時的に産地・個体数を増したが、植生遷移による生息地の乾燥化などにより多くの産地が消失した。

概要

全長53–74mm。全体が金属光沢のある暗緑色をした中型のトンボで夏から秋に出現する。成熟したオスは水田や湿地上で縄張り飛翔を行いメスの飛来を待つ。黄昏時には生息地周辺の高所を広範囲に飛び回る。同属のハネビロエゾトンボとは混生するうえ、特にオスの形態が酷似するため、同定には注意を要する。雌雄とも腹部に黄斑があるのが本種であるが、成熟した雄では黄斑の消失する個体も見られ、尾部上付属器による確認が必要である。

参考文献

樋野耕一 (2018) 2017年に記録した出雲地方のトンボ。すかしば, 65: 5-10.
 大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36.
 大浜祥治 (2009) 隠岐・島前のトンボ追加記録。すかしば, 57:37-44.
 大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相 V。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含め、県内全域の丘陵地から山地にかけての湿地的環境に分布するが、生息地は限定される。

存続を脅かす原因

植生遷移等による湿地の乾燥化や草原化、造成・残土処分等による湿地の消失。

(執筆: 大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目トンボ科

ヒメアカネ

Sympetrum parvulum (Barteneff, 1912)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

湿地や水はけの悪い水田などに生息し、生息地が限定される。近年産地の減少が著しい。

概要

全長28—38mm。県内で見られるアカトンボ属の中では最小の種類。マユタテアカネに似るが、顔面の眉斑が無いかあっても薄く小さいことなどで区別できる。羽化は5月下旬ごろから始まり、成虫は平野部では11月ごろまで見られる。メスは交尾後、オスと連結あるいは単独で、腹部を泥の中に差し込むように産卵するのが観察される。朝鮮半島から中国東北部、ウスリーまで分布し、国内では北海道から九州まで分布。

参考文献

大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36。
大浜祥治 (2009) 隠岐・島前のトンボ追加記録。すかしば, 57:37-44。
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含め県全域に広く分布するが、生息地は限定される。湿地的環境に生息し、産地ではモートンイトトンボやハッチョウトンボとの混生がしばしば観察される。

存続を脅かす原因

造成や残土処分等開発による、湿地・休耕地など生息地の消失やそのような環境の乾燥化、草原化。成虫の休息場所となる周辺雑木林等の伐採。

(執筆者:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目トンボ科

ミヤマアカネ

Sympetrum pedemontanum elatum (Selys, 1872)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

低山地を中心にかつては比較的普通に見られたようであるが、近年生息地の減少傾向が顕著である。

概要

全長30—41mmのやや小型のアカトンボ。翅の縁紋付近から内側にかけて、特徴的な幅広い帯状斑があるため他種との区別は容易である。羽化は6月下旬ごろから始まり、成虫は11月下旬近くまで見られる。秋に羽化する個体もいるようで、一部2化の可能性があるという。未成熟個体は羽化水域から遠くへ移動することは少なく、近くの草地などに留まっていることが多い。交尾後のメスはオスと連結あるいは単独で打水産卵する。国内では北海道から九州まで、国外では朝鮮半島、中国、ロシア、ヨーロッパに分布。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (22), 1-116。
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, (6):215-290。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島および島根半島部を除き、低山地を中心に広く分布する。山間の水田やそれに付随する緩やかな流れがおもな生息環境である。

存続を脅かす原因

圃場整備による水田の消失および、水田地帯を緩やかに流れる小川のコンクリート化。

(執筆者:樋野 耕一)

準絶滅危惧 (NT)

バッタ目コオロギ科

ハマスズ

Dianemobius csikii (Bolivar, 1901)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



■ 選定理由

自然度の高い砂地環境に生息する種であり、県内での生息地も減少している。

■ 概要

体長約7mm。灰白色の地に褐色(あるいは灰色)の斑があり、砂とそっくりの体色をしている。2化性で、成虫期は6~10月。時々「チョンチョン」という音をまじえながら「ビービー」と鳴く。海岸植物が多い良好な自然の砂浜や河川敷に生息する。国内では北海道南部、本州、四国、九州、奄美諸島、国外では朝鮮、中国北部に分布する。

●参考文献

林 成多・大浜祥治 (2014) 島根県に生息する直翅目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号,(11): 1-90.
日本直翅学会編 (2016) 「日本産直翅類標準図鑑」。学研。

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部から西部の海浜植物群落を伴った砂浜で記録されている。県内では内陸での記録は無い。隠岐諸島には生息していないとみられる。

■ 存続を脅かす原因

海浜植物群落を伴った砂浜の減少。海岸浸食による砂浜や砂丘の減少。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

バッタ目イナゴ科

セグロイナゴ

Shirakiacris shirakii (Bolivar, 1914)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):門脇久志



■ 選定理由

県内での生息地は限定されている。

■ 概要

体長約30-40mm。中型のイナゴ類。体色は黒灰色から茶灰色で、黒褐色の斑紋がある。複眼には6条の黒線がある。河川敷、丘陵地の疎らな湿った草原に生息する。国内では本州、四国、九州、対馬、南西諸島、国外では朝鮮半島、沿海州南部、中国、カシミール、パルチスタンなどに分布する。

●参考文献

林 成多・大浜祥治 (2014) 島根県に生息する直翅目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号,(11): 1-90.
日本直翅学会編 (2016) 「日本産直翅類標準図鑑」。学研。
大浜祥治 (2019) 松江市本宮山山麓でセグロイナゴを発見。すかしば, (66): 10-11.

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部から西部、隠岐諸島で記録されている。近年の記録があるのは県東部のみである。

■ 存続を脅かす原因

採草地の放棄による植生遷移。草地を一斉に刈り取る事による単純化、放置によるマント群落化、セイタカアワダチソウなどの外来植物の繁茂。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

バッタ目バッタ科

ヤマトマダラバッタ

Epacromius japonicus (Shiraki, 1910)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



■ 選定理由

海浜植生を伴った砂丘海岸に生息する種であり、県内での生息地も自然度の高い砂浜に限定されている。

■ 概要

体長30–35mm。体色は白地に黒や茶色の斑模様の個体が多いが、緑色に赤褐色の斑模様を持つ個体もいる。幼虫期を含め、生息地の砂地の色によく似ており、動かないと見つけることは難しい。北海道、本州、四国、九州、朝鮮に分布する。

● 参考文献

林 成多・大浜祥治(2014) 島根県に生息する直翅目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(11): 1-90。
日本直翅学会編(2016)「日本産直翅類標準図鑑」。学研。

■ 県内での生息地域・生息環境

県内では東部から西部までの砂丘の発達する海岸や河口の砂洲に生息している。県内の砂浜海岸は、大社から湖陵付近の出雲砂丘が最大で、本種の最大の生息地でもある。隠岐諸島では記録がなく、生息の可能性も低い。全国的にみれば島根県は自然度の高い砂浜が多く残されており、良好な生息地としての価値は高い。

■ 存続を脅かす原因

砂浜海岸の開発や海岸浸食による砂浜や砂丘の減少。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

カマキリ目カマキリ科

ウスバカマキリ

Mantis religiosa (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



■ 選定理由

県内ではまれな種であり、生息地が限られている。

■ 概要

体長約52–66mm。成虫・幼虫共に前脚基節の内側に黒紋がある。卵のうはやや長い枕形で壁・石下などに産みつけられる。造成地などの草地や河川敷・海岸の草原など開けた明るい環境を好み、安定した草原に生息する。国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島、国外では朝鮮半島、台湾、中国、シベリア、インド、中～南ヨーロッパ、北アフリカ、北米(移入)に分布する。

● 参考文献

林 成多(2015) 島根県の海岸に生息する昆虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(14): 1-120。
日本直翅学会編(2016)「日本産直翅類標準図鑑」。学研。

■ 県内での生息地域・生息環境

本土域および隠岐諸島で記録されている。隠岐諸島の記録は再確認が必要である。沿岸部の記録が多い。

■ 存続を脅かす原因

安定した草原の減少。河川改修。海岸の開発。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目タイコウチ科

ヒメミズカマキリ

Ranatra unicolor Scott, 1874

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



■ 選定理由

全国的に平野部の溜池などの消失によって、生息地が失われている。県西部では近年の確かな記録が少ない。

■ 概要

成虫の体長は24-32mmの細長い水生カメムシである。体は黄褐色で体長の3分の2程度の呼吸管を持つ。産卵期は6月下旬から7月。卵はヒシやジュンサイなどの浮葉植物の組織内に産み付けられる。8月頃成虫が現れ、メダカなどの小動物を捕食する。北海道・本州・四国・九州・沖縄、朝鮮半島・中国北部・東シベリアに分布。

●参考文献

川野敬介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明(2011) 島根県産水生半翅類の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(2): 104pp. 大浜祥治(2015) 島根半島沿岸部のヒメミズカマキリとコオイムシの記録。すかしば,(59):43.

■ 県内での生息地域・生息環境

県本土の平野部や丘陵地の小規模な溜池など約10カ所で確認されている。島根半島の南側の松江市から出雲市(旧平田市)の丘陵地では小規模なため池が点在し、その多くが本種の生息地となっている。

■ 存続を脅かす原因

溜池などの埋め立てや破壊。各種排水の流入。ブルーギルやブラックバスなど外来魚の放流。長期間の水抜き。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ミズムシ科

ホッケミズムシ

Hesperocorixa distantii hokkensis (Matsumura, 1905)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):尾原和夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



■ 選定理由

生息場所の止水域が開発や都市化によって失われ、全国的に絶滅に瀕している。

■ 概要

体長10mm前後の水生カメムシのなかまである。体は淡青黄色で黒色の条斑がある。前胸背の黒色黄帯は9-12本。後肢をのばしてオールのように動かし、水中を泳ぐ。後肢ふ節には長毛が密集している。水中の小動物を捕らえて体液を吸収する。成虫で越冬し、3月ごろ産卵し、新成虫は6月ごろ出現する。北海道・本州・九州、朝鮮半島・中国に分布する。西日本に生息するのは本亜種とされる。

●参考文献

川野敬介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明(2011) 島根県産水生半翅類の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(2): 104pp.

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部の丘陵地のヒシやジュンサイが繁茂したやや富栄養化した溜池数カ所で生息が確認されている。

■ 存続を脅かす原因

溜池など埋め立て、各種排水の流入。ブルーギルなど外来魚の放流。長期間の水抜きなど。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ミズムシ科

オオミズムシ

Hesperocorixa kolthoffi (Lundblad, 1933)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 桐原佳介

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

本州西部、四国および九州に分布するが、池沼環境悪化により激減している。県内では近年生息が確認された。

概要

同属のホッケミズムシよりやや大きく、体長10.8–13.4mmでやや丸みがあり、雄の顔の中央部は広く凹む。生態もホッケミズムシとよく似ており、池沼に生息する小動物を捕食する。ときに群生するが、産地は局地的。国内では本州（近畿地方以西）、四国、九州、国外では朝鮮半島、中国、ロシアに分布する。

参考文献

林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵 (2015) 隠岐諸島における昆虫分布調査Ⅳ. ホシザキグリーン財団研究報告(18):179-196.
林 成多・野崎達也・片岡大輔・篠原隆佑・近藤陽介 (2019) 島根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園におけるカメムシ類(半翅目)調査. ホシザキグリーン財団研究報告(22):1-12.
川野敏介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明 (2011) 島根県産水生半翅類の分布記録. ホシザキグリーン財団研究報告特別号(2):104pp.
小早川誠・大浜祥治 (2007) 隠岐・島前で得られた水生昆虫. すかしば(55):51-54.

県内での生息地域・生息環境

県東部の数カ所と隠岐(島前)で記録がある。比較的開けた環境の止水域に生息する。他県では学校のプールで発生したという報告もある。

存続を脅かす原因

溜池や水路などのコンクリート化や各種排水の流入。ブルーギルなどの外来魚の放流。長期間の水抜きなど。

(執筆: 尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ミズカメムシ科

ウミミズカメムシ

Speovelia maritima Esaki, 1929

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

自然度の高い岩礁海岸に生息するミズカメムシである。生息に適した環境に限られている上に、本種が好む微環境は改変の影響を受けやすい。

概要

体長4mm内外、褐色で頭は大きく、複眼が突出する。体は硬く頑丈。口吻は長く後脚基節に達する。無翅で、長翅型は確認されていない。海蝕洞や岩礁地帯の石下で発見される。幼虫は初夏から夏にみられる。分布域は北海道・本州・四国・九州・南西諸島、朝鮮など。近似種が本州・四国・九州に分布する。

参考文献

林 成多 (2007) 島根半島におけるウミミズカメムシの生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告(10):115-118.
Watanabe, K., J. Nakajima and M. Hayashi (2023) *Nagisavelia hikarui*, a new genus and species of Mesoveliinae (Hemiptera: Heteroptera: Mesoveliidae) inhabiting shingle beaches in Japan. Zootaxa, 5353(5): 468-478.

県内での生息地域・生息環境

1957年頃浜田市の河口付近で得られ、その後しばらく確認されていなかった。2000年以降に島根半島や隠岐諸島で再発見された。

存続を脅かす原因

岩礁地帯の破壊、コンクリート化、水質汚濁などの環境の悪化。

(執筆: 林 成多)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ミズカメムシ科

ナギサミズカメムシ

Nagisavelia hikarui Watanabe, Nakajima & Hayashi, 2023

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

自然度の高い岩礁海岸に生息するミズカメムシである。生息に適した環境に限られている上に、本種が好む微環境は改変の影響を受けやすい。

概要

2023年に新種として記載された。ウミミズカメムシよりも小型で体長2-3mm内外、褐色で頭は大きい。複眼は退化傾向があり、個眼が小さい。体は硬く頑丈。口吻は長く後脚基節に達する。無翅で、長翅型は確認されていない。岩礁地帯の石下や礫浜に生息する。分布域は本州・四国・九州。

参考文献

林 成多 (2007) 島根半島におけるウミミズカメムシの生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 115-118.
Watanabe, K., J. Nakajima and M. Hayashi (2023) *Nagisavelia hikarui*, a new genus and species of Mesoveliinae (Hemiptera: Heteroptera: Mesoveliidae) inhabiting shingle beaches in Japan. Zootaxa, 5353(5): 468-478.

県内での生息地域・生息環境

島根県内では2006年に確認されていたが、ウミミズカメムシの幼虫として報告されていた。その後の検討によって新種として報告された。島根県での生息環境はウミミズカメムシとほぼ同じである。隠岐では確認されていない。

存続を脅かす原因

岩礁地帯の破壊、コンクリート化、水質汚濁などの環境の悪化。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目カタビロアメンボ科

オヨギカタビロアメンボ

Xiphovelia japonica Esaki & Miyamoto, 1959

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

生息地が局地的であるため。

概要

体長1.5-2.5mm。体は光沢のない黒色で、中胸背や腹部背面に銀灰色毛による紋様が見られる。ふつう無翅型だが、まれに長翅型が出現する。生息地では密集して生息する。

参考文献

川野敬介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明 (2011) 島根県産水生半翅類の分布域録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (2): 1-104.

県内での生息地域・生息環境

浜田市のみで確認されている。河川の護岸ブロックの間やため池の岸部に生息する。

存続を脅かす原因

生息環境の悪化と消失。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目アメンボ科

エサキアメンボ

Limnophorus esakii (Miyamoto, 1958)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):尾原和夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

アジア東部に分布するアメンボ。国内では関東地方から九州北部に生息するが、産地は限られる。

概要

体長10mm前後、中型の繊細なアメンボである。体は褐色で体側は銀白色、頭部は黒色で褐色の条斑がある。触角は長く、第4節が最長。国内では本州・九州、国外では朝鮮半島・中国に分布する。池沼や流水域のヨシやマコモなどの抽水植物の間で活動するため見つかりにくい。比較的安定した水域で生活し水辺で産卵、越冬する。

参考文献

林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵(2015) 隠岐諸島における昆虫分布調査Ⅳ。ホシザキグリーン財団研究報告(18):179-196。
川野敏介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明(2011) 島根県産水生半翅類の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号(2):104pp。
尾原和夫(2006) 隠岐諸島のアメンボ類。Rostria, (52): 61-63。

県内での生息地域・生息環境

県東部平野部の溜池や水路河口部などで確認されている。隠岐諸島にも生息する。

存続を脅かす原因

池沼や流水域のヨシ帯の破壊、各種排水の流入による水質汚濁。ブルーギルやブラックバスなど外来魚の放流。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ハナカメムシ科

ズイムシハナカメムシ

Lycotocoris beneficus (Hiura, 1957)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):尾原和夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

戦後の稲作農法の改変や強力な農薬の使用によって激減し、全国的に絶滅に瀕している。

概要

体長4mm前後のハナカメムシのなかまで、黒褐色で光沢があり、微毛を散布する。この科の中では比較的大型である。本州・四国・九州に分布する。当初はズイムシ(イネの害虫カメイガの幼虫)の天敵として知られていたが、このガも激減している。最近埼玉県のある里山の林縁部で野積みの枯草や枯れ枝葉下でトビムシなどと共に見つかった。

参考文献

野澤雅美・山田暁崇(2020) 積み枯葉から発見された多数のズイムシハナカメムシ。Rostria,(65):61-63。
尾原和夫(2008) 中海岸における半翅類の定点調査。すかしば, (56): 19-22。

県内での生息地域・生息環境

斐伊川水系河川水辺の調査等で木次町から安来市にかけての河川敷数カ所で灯火採集によって記録されている。

存続を脅かす原因

里山や河川敷などの管理不足や放置による遷移の進行。農地周辺の林縁の開発や物理的破壊、農薬散布。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目サシガメ科

アダチアカサシガメ

Haematoloecha adachii Tachikawa, 1968

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島田孝

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

暖地に棲む地表性のサシガメであるが、同属の他種に比べてきわめてまれな種である。太平洋側に記録は集中するが、隠岐(島後)で近年確認されている。

概要

体長10-13mmで前胸背板前葉が黒色となること、前翅革質部が広く赤色を呈することなどで、同属の他種から区別できる。本州・四国・伊豆諸島(御蔵島)で記録されているに過ぎない。

参考文献

林 成多・藤原淳一・島田 孝・米田友祐・六車恭子・成田行弘(2006) 隠岐諸島における昆虫相に関する一資料。ホシザキグリーン財団研究報告,(9):245-263。
島田 孝・石川 忠(2004) 隠岐島後からアダチアカサシガメを発見。すかしば, (52):16。

県内での生息地域・生息環境

隠岐島後(隠岐の島町)で冬季、海岸沿いの林床の腐朽木材中で越冬している1個体が発見された。その後同島中部の自然林でも発見された。県本土では未確認。

存続を脅かす原因

自然林林床部の破壊や汚染。温暖化による乾燥や山火事。

(執筆者: 尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ナガカメムシ科

ハマベナガカメムシ

Peritrechus femoralis Kerzhner, 1977

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 尾原和夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

河口や海浜の草本間に生息するが、個体数が少なく確認地は全国的に限られる。県内では東部数カ所で確認されている。

概要

体長4.3-5.5mm、体は黄褐色で黒色点刻を散布するが目立った斑紋はない。草本群落が見られる開けた河原や河口や海浜で得られる。分布は北海道・本州・九州・四国、ロシア極東部・中国北東部。

参考文献

林 成多(2015) 島根県の海岸に生息する昆虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号,(14),120pp
尾原和夫(2008) 中海岸における半翅類の定点調査。すかしば, (56): 19-22。

県内での生息地域・生息環境

河川水辺の調査などで三刀屋町、木次町の斐伊川河川敷、安来市赤江町の吉田川河口で得られている。また、大社海岸では砂地の草本群落において発見されている。

存続を脅かす原因

自然度の高い河原・河口や海浜などの汚染や破壊、近傍での農薬剤散布。

(執筆者: 尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目クヌギカメムシ科

ヨツモンカメムシ

Urochela quadrinotata (Reuter, 1881)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):尾原和夫

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

樹上生活をする寒地系のカメムシで、県東部山地など数か所に記録があるが、個体数は少ない。

概要

体長15mm内外、赤みを帯びた褐色で各半翅鞘上に黒紋がある。触角は長い。山地のハシバミやシデ類に見いだされる。新成虫は9月に現れる。国内では北海道・本州・九州、国外では朝鮮半島・東シベリアに分布する。同属にはバラ科木本につくナシカメムシがあるが、本県では見られなくなった。

参考文献

皆木宏明 (2021) 島根県中部の三瓶山で確認されたヨツモンカメムシ (カメムシ目) の記録. 三瓶自然館研究報告,(19):127.
野津幸夫 (2020) ヨツモンカメムシを島根県奥出雲町で採集. すかしば, (67): 43.
尾原和夫 (2002) 島根県で採集記録の少ない異翅半翅類について. すかしば, (50):73-75.

県内での生息地域・生息環境

県東部山地帯山麓部や三瓶山の落葉広葉樹林3か所で記録がある。

存続を脅かす原因

山地帯の落葉広葉樹林の伐採、気候の温暖化による植生の遷移。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ツチカメムシ科

ハマベツチカメムシ

Bysinus variansi (Fabricius, 1803)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):尾原和夫

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

自然度が高く規模の大きい海浜砂丘に生息地が限定される。山陰海岸では数カ所が確認されているのみである。

概要

体長3.5-4.5mm、体は暗褐色から濃く褐色、触覚と各脚は黄褐色。海浜の草本植物の根際で得られる。植物からも吸汁することがある。本州・九州、国外では朝鮮半島・中国・東洋区に分布。

参考文献

林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵 (2015) 隠岐諸島における昆虫分布調査Ⅳ. ホシザキ グリーン財団研究報告,(18):179-196.
中園洋行 (2004) ハマベツチカメムシを島根県で採集. すかしば, (52):16.
尾原和夫 (2021) 大田市におけるハマベツチカメムシとスナコバナナガカメムシの生息記録. すかしば, (68):7-9.
鶴崎展巨・江澤あゆみ・岸本理沙・岡村和紀・梅原将史 (2008) ハマベツチカメムシの鳥取砂丘からの記録. すかしば,(56):37-38.

県内での生息地域・生息環境

出雲市、大田市、益田市や隠岐の砂質海岸で、コウボウムギやハマボウフウ群落の根際で多数得られている。他地域でも良好な砂質海岸で生息する可能性がある。

存続を脅かす原因

砂質海岸の浸食による消失、汚染や漂着物の堆積。海浜植物群落の衰退。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目ツチカメムシ科

シロヘリツチカメムシ

Canthophorus niveimarginatus Scott, 1874

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):尾原和夫



選定理由

旧北区東北部を分布の中心とし、日本は分布の南端にあたる。全国的に絶滅に瀕しており、県内でも近年の記録は数カ所である。

概要

体長6—8mm、光沢のある黒藍色で粗い点刻におおわれる。体の側縁は黄白色に縁とられる。ススキ草原のカナビキソウに依存し、メス成虫は卵を保護する習性がある。本州・四国・九州、国外では朝鮮半島・中国・シベリア・旧北区東北部に分布する。

参考文献

皆木宏明・三島秀夫(2023)三瓶山草原で確認した昆虫類の記録。三瓶自然館研究報告,(21):65-73。
宮武頼夫編(1996)「青木浩昆虫コレクション目録」大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第28集
中村慎吾・松田 賢(2005)島根県高津川の昆虫類,2000年の調査結果。おが「グリーン財団研究報告」,(8):99-172。
尾原和夫(2002)島根県で採集記録の少ない異翅半翅類について。すかしば,(50):73-75。

県内での生息地域・生息環境

戦前では三刀屋町で記録されているが現在では三瓶山と益田市で、環境の良好な山地や河川敷のススキ草原に生息する。

存続を脅かす原因

ススキ草原の環境汚染や破壊、地球温暖化などによる遷移の進行。
(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目カメムシ科

アオクチブトカメムシ

Dinorhynchus dybowskyi Jakovlev, 1876

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):尾原和夫



選定理由

アカアシクチブトカメムシと同様寒地系の樹上性カメムシで、本県は本州における分布の西南限であり、およそ20年前に採集されているが、その後の記録がない。

概要

体長18—23mm、金緑色の光沢のある美麗種。前胸背側角は棘状にとがり、口器は太い。山地の樹上で生活し、ガ類幼虫などを捕食するが、ケヤキやクヌギなどからも吸汁することがある。北海道・本州・四国・九州、朝鮮半島・中国・ロシア極東部に分布する。

参考文献

尾原和夫(2000)島根県で採集された未公表の異翅半翅類。すかしば,(48):33-41。

県内での生息地域・生息環境

三瓶山と大万木山の2カ所で記録されている。中国山地の環境の良好な落葉広葉樹林に生息する。

存続を脅かす原因

山地の落葉広葉樹林の伐採や大気汚染などの環境の悪化、温暖化による照葉樹林への遷移。
(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目カメムシ科

アカアシクチブトカメムシ

Pintheaus sanguinipes (Fabricius, 1787)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):尾原和夫



■ 選定理由

大型の樹上性の捕食性カメムシで、生息地が局限され個体数も少なく生態系の自然度の指標となる。

■ 概要

体長14–18mm、緑色の光沢のある褐色で、前胸背側角黒みを帯び測方に突出し、先端は丸い。脚は赤褐色。山地の樹上で生活し、ガ類幼虫などの小型節足動物をを捕食する。北海道・本州・四国・九州、旧北区に分布する。

● 参考文献

尾原和夫 (2000) 島根県で採集された未公表の異翅半翅類。すかしば, (48):33-41.
尾原和夫 (2002) 島根県で採集記録の少ない異翅半翅類について。すかしば, (50):73-75.

■ 県内での生息地域・生息環境

三瓶山と西部山地2カ所で記録がある。中国山地の環境の良好な落葉広葉樹林に生息する。

■ 存続を脅かす原因

山地の落葉広葉樹林の伐採や大気汚染などの環境の悪化、温暖化による照葉樹林への遷移。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目カメムシ科

フタテンカメムシ

Laprius gastricus (Thunberg, 1822)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



■ 選定理由

本種はシバ草原の地表に生息する特異なカメムシで、放牧業の衰退によって全国的に生息環境が失われている。

■ 概要

体長13mm前後のカメムシのなかまでである。体は灰褐色から黒褐色で小楯板の上端2カ所に白点がある。草食性で、イネ科草本の根ぎわに生息する。成虫で越冬し、石下などに潜んでいる。本州・四国・九州、朝鮮半島・中国・インドに分布する。

● 参考文献

林原毅一郎 (1992) 知夫里島のカメムシ類。すかしば, (37/38):61-63.
大生唯統・松井悠樹 (2023) フタテンカメムシの鳥取県における初記録と島根県における追加記録。すかしば, (70):48.
大浜祥治 (2016) 隠岐・島前で採集したの陸生カメムシ類メモ。すかしば, (63):11-13.
大畑純二・皆木宏明・三島秀夫 (2003) 三瓶産昆虫目録(IV)。島根県立三瓶自然館。

■ 県内での生息地域・生息環境

隠岐(島前)の知夫里島と西ノ島、三瓶北の原や大社海岸でも採集されている。主要な生息地は牛の放牧地として利用されて、良好なシバ草原の状態である。土地的極相がシバ草原のような環境で生息できると思われる。

■ 存続を脅かす原因

放牧の中止など、シバ草原の放置。生息地およびその周辺における農業散布など。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目セミ科

エゾゼミ

Auritibicen japonicus (Kato, 1925)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):尾原和夫



選定理由

大型の寒地性のセミであり、森林の自然度の指標となる。隠岐島後は日本海側の離島では分布の西限となる。

概要

体長は37-43mmでオスがやや大きく、翅端までは雄雌とも58-65mmである。全体に黒味が強く前胸背の上方に白線があり、側縁が白粉におおわれている。「ギィー」と数分間連続的に鳴く。日本全土および朝鮮半島に分布し、ヒノキなどが生える針葉樹林に多い。

参考文献

林 成多・野崎達也・片岡大輔・大對桂一(2020) 大万木山におけるカメムシ類調査(2018・2019年), ホシザキグリーン財団 研究報告,(24):43-59.
尾原和夫(2002) 島根県における山地性セミ類の記録, すかしば,(50):50.
尾原和夫(2012) 島根県のセミ類, 近年の生息情報, すかしば,(59):34-35.
大浜祥治(2001) 島根県のセミ分布メモ, すかしば,(46):20-21.
税所康正(2004) 大万木山のエゾゼミ類, CICADA, 18(1):9-10.

県内での生息地域・生息環境

アカエゾゼミより標高の低いスギ、ヒノキなどの植林地にも生息する。県内では低山地から標高900mくらいが上限である。高い梢上で鳴いているオスは見つけにくい。隠岐(島後)の生息地では減少傾向にある。

存続を脅かす原因

低山地からブナ帯下部にかけての森林破壊や殺虫剤散布。スギ、ヒノキ人工林の放置。

(執筆:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目セミ科

アカエゾゼミ

Auritibicen flammatus (Distant, 1892)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):白石泰志



選定理由

国内のブナ帯に生息する大型の美しいセミで、県内では標高800m以上のブナ帯に生息する。本県西部山地が本州における西限分布域となる。

概要

体長は37-43mmでオスがやや大きく、翅端までは58-65mmである。エゾゼミとよく似るが、全体に赤味が強く前胸背の上方に白線がなく、側縁も白粉におおわれていない。また前翅の暗色斑の様子によって区別できる。北海道・本州・四国・九州、朝鮮半島・中国に分布する。600-1,200mのブナ・ミズナラ帯に生息し、産地は局所的である。7月下旬から9月上旬にかけてあらわれ、日当たりのいい梢で、「ギィー……」と太く短く鳴く。

参考文献

林 成多・野崎達也・片岡大輔・大對桂一(2020) 大万木山におけるカメムシ類調査(2018・2019年), ホシザキグリーン財団研究報告,(24):43-59.
尾原和夫(2002) 島根県における山地性セミ類の記録, すかしば,(50):50.
大浜祥治(2025) 隠岐/島後でのアカエゾゼミ確認のこと, すかしば,(72):10-11.
坂田国嗣(1999) 仁多町各谷にてコムシジ異常型とアカエゾゼミを採集, すかしば,(47):41.
山田 学(2001) 匹見町のセミ・ナナフシ・カマキリ・ゴキブリの記録, すかしば,(49):17-19.

県内での生息地域・生息環境

三瓶山および中国山地の山頂付近数カ所で確認されているが、ブナ帯下部の標高がやや低い場所や隠岐島後でも2024年に1個体が採集され今後の調査が期待される。

存続を脅かす原因

ブナ、ミズナラを含む広葉樹林の伐採や分断。温暖化によるブナ林の衰退。

(執筆:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目セミ科

ハルゼミ

Yezoterpnosia vacua (Olivier, 1790)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):三島秀夫



選定理由

アカマツやクロマツ林に生息するセミであるが、県内の平地では近年マツ枯れによって生息林が失われつつある。

概要

体長はオスが30mm、メスが24mmで、体は黒色で細かな灰色の鱗毛を装う。オスの腹部は袋状で、メスの腹部は短く先端は細長い産卵管となる。本州・四国・九州、中国に分布し、成虫は4月下旬から6月末に出現する。

参考文献

樋野耕一 (2018) 峯寺でヒメハルゼミを採集。すかしば, (65):30.
 大浜祥治 (2015) 島根県内の平地性セミ数種の分布メモ。すかしば, (62):34-35.
 大畑純二・皆木宏明・三島秀夫 (2003) 三瓶産昆虫目録(IV)。島根県立三瓶自然館。
 山田 学 (2001) 匹見町のセミ・ナナフシ・カマキリ・ゴキブリの記録。すかしば, (49):17-19。
 山本正志 (2020) 島根県奥出雲町及びその周辺の昆虫類の採集および観察。すかしば, (67) : 51-65。

県内での生息地域・生息環境

平地から低山地のマツ林に生息するが、隠岐諸島には生息しない。出雲市の浜山公園は代表的な生息地であったが、近年では鳴き声あまり聞かれなくなった。海岸部のクロマツ林では絶滅状態である。一方山間部の標高600m程度のアカマツ林では発生がやや遅く個体数も少ないが生息範囲は比較的広い。

存続を脅かす原因

温暖化や「マツ枯れ」によるマツ林の衰退、植生遷移による照葉樹林への移行。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目セミ科

ヒメハルゼミ

Euterpnosia chibensis chibensis Matsumura, 1917

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

一定規模以上の照葉樹林に生息する小型のセミで、県内にわずかに残存する極相的自然の指標となる。

概要

体長は23-29mmであるがオスがやや大きく、翅端まで32-37mmである。メスの産卵管は長く後方にのびる。本州・四国・九州・沖縄本島・屋久島・トカラ列島・奄美大島、朝鮮半島に分布する。6月中旬から7月下旬に出現し、シイやカシなどの照葉樹上で「ウィーン・ウィーン」と一斉に「合唱」する。

参考文献

樋野耕一 (2018) 峯寺でヒメハルゼミを採集。すかしば, (65):30。
 尾原和夫 (2002) 島根県における山地性セミ類の記録。すかしば, (50):50。
 尾原和夫 (2011) 脱皮殻調査によるヒメハルゼミの羽化曲線。CICADA, 20(1/2):18-20。
 大浜祥治 (2015) 島根県内の平地性セミ数種の分布メモ。すかしば, (62):34-35。
 山田 学 (2001) 匹見町のセミ・ナナフシ・カマキリ・ゴキブリの記録。すかしば, (49):17-19。

県内での生息地域・生息環境

極相に近い照葉樹林に生息するが、二次林的な要素をもつ地域にも見られる。出雲部では、著名な寺社林に大きな生息地があるほか海岸部から山間地まで生息場所が点在している。石見地方では山間部でも確認されている。

存続を脅かす原因

スダジイ林、カシ林などの破壊、分断。アカマツをまじえた林分の周辺における「松枯れ対策」殺虫剤散布等。

(執筆者:尾原 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

カメムシ目キジラミ科

エノカイガラキジラミ

Celtisaspis japonica (Miyatake, 1968)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

おもにエノキの大木がまとまって生える場所に生息する種である。古くからエノキが自生・植栽されている場所が減少しており、本種の生息地も限定されている。

概要

体長約3.6mm。体および前翅の大部分は黒色。秋型の成虫の前翅には透明な帯がある。触角の先端以外は全体に黄褐色。胸部の幅が広く、頭部は相対的に小さい。前翅の表面には細かく不規則なシワが多く、鈍い光沢がある。初夏に出現する幼虫はエノキの葉表にツノ状のゴールを形成し、葉裏には貝殻状の覆いがある。秋に出現する幼虫はゴールを作らず、葉裏に貝殻状の覆いがあるのみである。日本固有種で、本州と九州に分布する。

参考文献

林 成多・宮武頼夫 (2012) 山陰地方のキジラミ図鑑。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (6) : 1-97.
林 成多・宮武頼夫・門脇久志 (2011) 島根県のキジラミ相。ホシザキグリーン財団研究報告, (14) : 213-250.
Miyatake, Y. (1968) *Pachypsylla japonica* sp. nov., A remarkable leap-forming psyllid from Japan. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 21: 5-12.
Miyatake, Y. (1980) Notes on the genus *Pachypsylla* of Japan, with description of a new species (Homoptera: Psyllidae). Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., (33) : 61-70, pl. 18.

県内での生息地域・生息環境

県内では東部や中部で記録がある。

存続を脅かす原因

エノキの大木の減少。低地ではエノキノミゾウムシの増加も本種の生息に影響を与えている可能性がある。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

アミメカゲロウ目ウスバカゲロウ科

ハマベウスバカゲロウ

Myrmeleon solers Walker, 1853

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

海浜植生を伴った砂丘海岸に生息する種であり、県内での生息地も自然度の高い砂浜に限定されている。

概要

前翅長27mm前後。翅は透明で顕著な模様はない。体は全体に黒く、前胸背にY字型の黄褐色斑紋がある。海浜砂丘に生息する。幼虫は、汀線から離れた砂浜や海浜植生帯の汀線寄りの砂地上にすり鉢型の巣穴を造るアリジゴクである。国内では日本海側を中心とした本州、九州の海岸に生息し、国外では中国に分布する。

参考文献

林 成多 (2025) 島根県産アリジゴクの再検討。ホシザキグリーン財団研究報告, (28): 109-120.
鶴崎展巨 (2008) 島根県と福岡県における海浜性アリジゴク(脈翅目:ウスバカゲロウ科)の分布。すかしば, (56): 33-36.

県内での生息地域・生息環境

県内では東部から西部までの砂丘の発達する海岸に生息している。県内の砂浜海岸は、大社から湖陵付近の出雲砂丘が最大で、本種の最大の生息地でもある。隠岐諸島では記録がなく、生息の可能性も低い。全国的にみれば島根県は自然度の高い砂浜が多く残されており、良好な生息地としての価値は高い。

存続を脅かす原因

砂浜海岸の開発、海岸浸食。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

アミメカゲロウ目ツノトンボ科

キバネツノトンボ

Libelloides ramburi (MacLachlan, 1875)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



■ 選定理由

分布が局所的であり、土地造成等による生息する草地の消滅・環境悪化により、生息が脅かされる。

■ 概要

体長20—25mm内外。雌の方がやや大きい。体は黒く頭部や胸部の一部に黄斑があり、長い毛におおわれる。後翅の黄色と黒のコントラストが鮮やかで、生息地では非常に目立つ。丘陵地～山地にかけての草原に生息し、春から初夏にかけ活発に飛び回って小昆虫を捕食する。雌は草木の小枝等に卵を産み付ける。幼虫はアリジゴクによく似ているが、地面に漏斗状の巣を作ることはなく、地表を動き回りながら小昆虫を捉えて体液を吸う。

● 参考文献

三島秀夫 (2020) キバネツノトンボを三瓶草原で撮影。すかしば, 67: 46.
大生唯統 (2022) 伯耆大山におけるキバネツノトンボの追加記録。すかしば, 69: 32.
吉富博之・林 成多 (2020) キバネツノトンボを島根県で採集。ホシザキグリーン財団研究報告, 23: 22.

■ 県内での生息地域・生息環境

三瓶山の裾野に広がる草原の、西の原・北の原で2017年に初めて確認され(三島、2020)、2019年には三瓶山に隣接する、飯南町志津見・八神でも確認された(吉富・林、2020)。しかしながら、東部、西部では未記録である。県東部に隣接する、鳥取県大山周辺には産地が点在する(大生、2022)。本州・九州に広く分布するが、どこでも産地は局所的で生息環境が衰退している。日本特産種。

■ 存続を脅かす原因

生息する草原環境の保全。

(執筆者: 大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目オサムシ科

セアカオサムシ

Hmicarabus tuberculosus Dejian et Boisduvai, 1929

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 皆木宏明

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



■ 選定理由

山地草原性のオサムシで分布は局所的。

■ 概要

体長16—22mm。前胸背板は赤銅色。頭部と上翅測縁部も赤銅色を帯びる。上翅の大部は黒色で凸型条列を持つ。晩夏から秋に新成虫が出現して活動した後、土中や石下で越冬する。翌春に繁殖する。北海道、本州、四国、九州、ユーラシア東部、朝鮮半島で記録があり、中国地方近県では大山を含む中国山地の高標高地帯に残る草原地帯で生息が確認されている。成虫・幼虫とも主に昆虫類を主食としていると推測されている。

● 参考文献

林 成多 (2011) 島根県産甲虫目録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 4: 1-161.
井村有希・水沢清行 (2013) 「日本産オサムシ図説」, 368pp. 六本脚。
岡義人 (1970) 三瓶山でセアカオサムシ。NECYDALIS, 3: 9.
岡義人・曾田貞滋 (1979) 中国地方のオサムシ (1) -日野川流域～江川流域における地理的分布。すかしば, 12: 1-15.

■ 県内での生息地域・生息環境

三瓶山麓の草原周辺で生息している。

■ 存続を脅かす原因

生息地の自然草原や疎林の開発、また、植生遷移による草原の衰退など、本種の生息に適した環境の悪化。

(執筆者: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目オサムシ科

イズモメクラチビゴミムシ

Stygiotrechus izumonis S. Uéno, 2008

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

島根半島西部が本種の基準標本産地で、分布も同地域に限定されている可能性が高いため、比較的絶滅のリスクが高い。

概要

体長約2.8mm。淡色、無眼などの地中に適応した形質をもつ。九州北部から瀬戸内に分布するノコメクラチビゴミムシ属の中でササジメクラチビゴミムシとともに日本海側に産する特異な種で、本属の一部が日本海の海岸沿いに分散した可能性を示唆する。本属全体の分化を考える上でも重要な種である。

参考文献

Ueno, S. (2008) Occurrence of a New *Stygiotrechus* (Coleoptera, Trechinae) in the Shimane Peninsula, West Japan. *J. speleol. Soc Japan*, 33: 1-5.

県内での生息地域・生息環境

2008年に島根半島西部の廃坑で採集された1オスで記載された種で、その後の複数回の調査でも追加の記録を見ない。周辺の廃坑や地下浅層のトラップ調査でも採集されず、分布は局所的で個体群規模も小さいと考えられる。

存続を脅かす原因

廃坑内の地下水位変動が少ないことから生息地の地下環境は安定していると思われ、これを攪乱するような地上・地下の改変は絶滅リスクを増大させる。

(執筆者：新部 一太郎)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目オサムシ科

タイシャクナガチビゴミムシ

Trechiana yokoyamai S. Uéno, 1958

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

本種は中国地方中央部に広い分布域をもつが、島根県に分布する亜種及び地域個体群は分布域が狭く個体群規模が小さいため環境改変による影響を受けやすい。

概要

体長5.4—6.4mm。体は茶褐色で光沢があり、地中に適応した形質をもつが、小さい複眼が見られるなど地表種的な形質も残る。本種には浜田市に分布する県固有亜種（ハマダナガチビゴミムシ）をはじめ5亜種が記載されているほか、未記載のものも含めるとさらに4つ以上の亜種または独立した地域個体群が存在すると考えられる。

参考文献

Ueno, S. (1958) The cave trechids from the central part of the Chugoku District, Japan. I. A new species of *Trechiana* from the Taishaku limestone area. *Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, series B*, 25(3): 181-184.

県内での生息地域・生息環境

県内では浜田市、石見銀山周辺、月山（安来市）、船通山、島根半島で分布が確認されており、地理的に孤立している個体群が多い。特に島根半島の個体群は他の亜種と形態的に区別できる可能性がある。洞窟などのほか、川沿いの腐葉土層など地表付近でも見られることがあるが詳細な生息環境は不明。

存続を脅かす原因

ダム造成などの集水域単位での大規模改変は各亜種・地域個体群を絶滅させるおそれがある。

(執筆者：新部 一太郎)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

コマルケシゲンゴロウ

Hydrovatus acuminatus Motschulsky, 1860

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

生息地が減少しており、個体数も少ない。

概要

体長2mm前後。体型は卵形で背面を微細な点刻と網目状の印刻が覆う。オニギリマルケシゲンゴロウによく似ているが、より小型。水生植物の多いため池の浅瀬や放棄水田をおもな生息地としている。小型であるため、発見されにくい。アフリカ、オセアニア、中東から東アジアまで広く分布する。国内では、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117。
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含め、県内のため池で生息が確認されている。浅瀬で他の小型種のゲンゴロウ類と共に得られることが多い。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。生息地の浅瀬は水位変動の影響が大きく、極端な渇水も生息地が消失する原因になる。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

マルガタゲンゴロウ

Graphoderus adamsii (Clark, 1864)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

かつては県内各地のため池に生息していたが、2010年以降急速に減少した。

概要

体長12-15mmで体型は楕円形。上翅に細かな斑模様がある。成虫は春から秋に出現する。幼虫は初夏から夏に出現し、遊泳しながらミジンコ類を捕食する。極東ロシアから東アジアに分布する。国内では、北海道、本州、九州に分布する。主にため池に生息し、水田で繁殖する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117。
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
川野敬介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8): 77-97。
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。
西城 洋 (2001) 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動。日本生態学会誌, 51 (1): 1-11。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では島後で古い記録しかなく、記録が途絶えている。本土側では、ため池に成虫が生息し、幼虫は水田に生息していた。近年はかつて生息していた池での確認ができなくなり、限られた場所で確認されている。また、ビオトープなど新規の生息環境を創出することによって、本種が生息するような事例もある。

存続を脅かす原因

ため池の改修、廃止。水田の営農方法の変化。外来種(アメリカザリガニ、オオクチバス等)の侵入。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringii Clark, 1864

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

かつては県内各地のため池や水田に生息していたが、2010年以降急速に減少した。

概要

体長13-14mmで体型は楕円形。上翅は黒色で、一對の丸い斑紋と側方にそれぞれ2本の黄色い縦条がある。成虫は春から秋に出現する。幼虫は初夏から夏に出現し、カエル類の幼生を捕食する。東アジアに分布し、国内では、北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。主にため池と水田に生息する。

参考文献

林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
 川野敬介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8): 77-97.
 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。
 西城 洋 (2001) 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動。日本生態学会誌, 51 (1): 1-11.
 Watanabe, R., S. Ohba, and T. Yokoi. (2020) Feeding Habits of the endangered Japanese diving beetle *Hydaticus bowringii* (Coleoptera: Dytiscidae) larvae in paddy fields and implications for its conservation. *European Journal of Entomology*, 117: 430-441.

県内での生息地域・生息環境

県内では、隠岐諸島も含め、ため池や水田に生息していた。近年はかつて生息していた池等での確認ができなくなり、限られた場所で確認されている。また、ビオトープなど新規の生息環境を創出することによって、本種が生息するような事例もある。

存続を脅かす原因

ため池の改修、廃止。水田の営農方法の変化。水田におけるカエル幼生の減少。外来種（アメリカザリガニ、オオクチバス、ウシガエル等）の侵入。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

クロゲンゴロウ

Cybister brevis Aubé, 1838

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):小早川誠

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

水田・池沼の減少と護岸工事などの開発行為により生息地が局所化し、個体数が減少傾向にある。

概要

体長20~25mm。卵形で、背面は緑色または褐色を帯びた黒色で光沢がある。国内では本州・四国・九州、対馬に分布し、国外では中国・朝鮮半島・台湾に分布する。水生植物が繁茂した浅い池沼・水田・湿地などに生息し、環境省レッドリスト (2020) では準絶滅危惧 (NT)、複数の都道府県で絶滅危惧種に指定されている。近年、山林の開発による池沼の消滅・改修、農業流入による水質悪化、外来魚による捕食、生息地の遷移進行などにより生息地・個体数が急速に減少し、現在では丘陵地の限られた池沼にのみ残存する状況となっている。また、本種はやや水温の低い環境に生息するため、気候の温暖化の影響も本種への脅威となっている。

参考文献

森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版 図説日本のゲンゴロウ, 118pp. 文一総合出版
 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版

県内での生息地域・生息環境

かつては県内の広範囲にわたり生息が確認されていたが、近年メガソーラー発電所や高速道路の建設などに伴い生息環境が消滅し、個体数は減少傾向にある。本種の保全には、生息適地となる溜池や湿地の存続、水質保全および開発時の環境配慮が不可欠である。

存続を脅かす原因

水田の乾田化と溜池の護岸。農業の流入。外来魚による捕食圧の増大。
(執筆: 小早川 誠)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ミズスマシ科

コオナガミズスマシ

Orectochilus punctipennis Sharp, 1884

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

河川中流域に生息する小型の流水性ミズスマシであり、県内での生息地は限られている。

概要

体長5.5—6.2mm。体は紡錘形。背面は全体に黒い。上翅表面には微細な毛が密生する。オナガミズスマシより明らかに小型である。オナガミズスマシが山地渓流に生息するのに対し、本種は河川中流域の挺水植物の生えた淀みに生息する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117。
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

県内では東部や西部の河川で局地的に確認されている。生息環境の立地が人間活動の大きな場所に近いため、影響を大きく受けやすい。

存続を脅かす原因

河川改修。水質汚染、特に洗剤等の界面活性剤の流入。豪雨水害。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ミズスマシ科

ミズスマシ

Gyrinus japonicus Sharp, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

かつてはため池などの水面を群れて泳ぐ姿がよく見られたが、現在ではほとんど見られなくなっている。

概要

体長6.0—7.5mm前後。体型は紡錘形で背面に鉛色の光沢がある。一般に止水域の開けた水面を旋回しながら泳ぐが、流水環境にも生息する。近似種が数多く存在するが、体長により他種と区別できる。幼虫は水生で、腹部側面に細長い気管鰓を持つ。国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。止水性の種であるが、生息地の水域には常に水が流れ込むなど、水面の水質が保たれていることが重要である。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117。
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。
Sugiura, S. and M. Hayashi (2024) Defenses of whirligig beetles against native and invasive frogs. PeerJ 12:e17214

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含めた県内全域に分布する。池沼などの止水域や山地渓流の淀みなどに生息する。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁 (特に油の流入)、池沼の開発改修、自然遷移。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ホソガムシ科

チュウブホソガムシ

Hydrochus chubu Balfour-Browne et M. Sato, 1962

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

県東部の少数の溜池で生息が確認されているが、生息地が減少している。県中部および西部の生息状況は不明である。

概要

体長2.5mm前後。体は細長く、茶褐色で、体表面に青緑金属光沢を持つ。近縁種のヤマトホソガムシより小型である。止水域に生息する。国内では本州、四国、九州、国外では韓国(済州島)に分布する。水中で遊泳ができず、動きは緩慢である。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

やや富栄養な止水域に生息する。県内ではため池で確認されている。同所的にスジヒラタガムシが生息していることが多い。島根県東部の生息地は、全国的にみても重要な生息地域であったが、個体数の多い生息地は無くなりつつある。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ダルマガムシ科

クニビキアカダルマガムシ

Hydraena hayashii Jäch & Díaz, 2012

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

島根県固有種

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):森本涼介



選定理由

島根県固有種で、個体数が少なく分布域が偏っているため。

概要

体長1.5—1.8mm。背面は赤褐色～暗赤褐色で、体型は幅広い。上唇の切れ込みは浅い。低山地の細流の砂礫底や水際に堆積した落葉の隙間に生息する。成虫は1年中みられるが、夏に個体数が少なく、冬に多くなる傾向がある。野外で卵・幼虫は見つかっていない。日本固有種で島根県にのみ分布する。

参考文献

森本涼介・林 成多 (2021) 島根県における流水性ダルマガムシ科の追加記録および生態的知見。ホシザキグリーン財団研究報告, (24): 37-42.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 日本の水生昆虫, 117pp, 文一総合出版, 東京。

県内での生息地域・生息環境

県東部から中部まで局所的に分布し、低標高地の林内の細流で生息が確認されている。

存続を脅かす原因

大雨等の集中的なかく乱による生息環境の悪化・消失。

(執筆: 森本 涼介)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ダルマガムシ科

イズモコブセスジダルマガムシ

Ochthebius hayashii Jäch & Delgado, 2014

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

自然度の高い岩礁海岸に生息する。生息地が限られている。

概要

体長1.5—1.6mm。体は瓢箪型でやや扁平。背面は黒色で光沢は鈍い。島根県東部に分布する。鳥取県東部から九州にかけての日本海側には、本種と別の未記載種が分布している。本種は島根半島だけに分布している可能性がある。

参考文献

林 成多 (2015) 島根県の海岸に生息する昆虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (14): 1-120.
Jäch, M. A. and J. A. Delgado. (2014) Revision of the Palearctic species of the genus *Ochthebius* Leach XXIX. The Asian species of the *O. vandykei* group (Coleoptera: Hydraenidae). Koleopterologische Rundschau, 84: 81-100.

県内での生息地域・生息環境

島根半島の岩礁海岸に生息する。日中は岩の隙間に潜んでいる。

存続を脅かす原因

岩礁地帯の港湾開発、重油などによる水質汚染。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目 クワガタムシ科

ルリクワガタ

Platycerus delicatulus delicatulus Lewis, 1883

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

主として高齢級のブナ林に生息しており、生息地は限定される。

概要

体長オス9—14mm、メス8—13mm、オスは緑色を帯びた青藍色。メスは赤銅色、銅色、青緑色、青藍色、黒色など色彩変化に富む。前胸背板後角が丸みを帯び突出しないことからコルリクワガタ属と区別される。成虫は生育した材中で越冬し、5—7月に出現する。昼行性で、繁殖に利用する材周辺で見られる。まれにカエデやミズナラの新芽に飛来することが知られている。幼虫が生育に利用するブナ等の倒木に集まり産卵する。繁殖に利用する枯れ木は、コルリクワガタ類に比べて太いブナやミズナラ、倒木や立枯れ木を好むとされる。分布は本州、四国、九州。

参考文献

近木英哉 (1985) 島根県におけるルリクワガタ属について。すかしば, 24: 8.
加藤重和・椋木博昭 (2003) 安蔵山の甲虫。すかしば, 51: 1-8.
松原 至 (2001) 中国地方産ルリクワガタ属分布資料 (1)。鱧角通信, 3: 25-28.
松原 至 (2002) 中国地方産ルリクワガタ属分布資料 (2)。鱧角通信, 4: 15-17.

県内での生息地域・生息環境

県西部のブナ帯の中国山地で生息が確認されているが記録は少ない。

存続を脅かす原因

生息域であるブナを主体とする森林の開発による消失。

(執筆: 福井 修二)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目クワガタムシ科

ニシコルリクワガタ

Platycerus acuticollis akitai Fujita, 1987

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):板持孝祐



選定理由

主としてブナ帯に生息し、生息地は限定される。

概要

体長8-11mm。オスは青みの強い藍色、メスは銅色が中心であるが、緑や紫色の強い個体などの色彩変化がある。成虫は4-6月に出現する。成虫は早春にカエデ類、ミズナラ等の展葉前の新芽に傷をつけて吸汁する。産卵は主に林床に落ちた湿度の高い細めの枝に行われる。幼虫は材を摂食して成長し、翌年秋に材内で羽化して成虫で越冬の後、野外へ脱出する。近畿地方北部~九州に分布。

●参考文献

近木英哉 (1985) 島根県におけるルリクワガタ属について. すかしば, 24: 8.
松原 至 (2001) 中国地方産ルリクワガタ属分布資料 (1). 鯉角通信, 3: 25-28.
松原 至 (2002) 中国地方産ルリクワガタ属分布資料 (2). 鯉角通信, 4: 15-17.
山本正志 (2006) 島根県中部地域(江の川流域)におけるキンキコルリクワガタの採集・観察記録. すかしば, 54: 52-53.
横川忠司 (2020) ブナ帯を完全に欠く山地でのルリクワガタ属の分布 ~隠岐諸島・西ノ島でのニシコルリクワガタの追加記録とその分布の意義~ 月刊むし 592:10-13.

(執筆者: 福井 修二)

県内での生息地域・生息環境

中国山地および三瓶山のブナ林で林床の落枝の割材や、ミズナラ等の新芽に飛来した成虫が確認されている。また、隠岐島前・道後では高標高地の広葉樹の枯れ枝から発生が確認されている。

存続を脅かす原因

生息域であるブナ林等の開発による消失や乾燥など生息環境の悪化。生息地域が狭い隠岐地域は発生源となっている材の採集など、過度の採集による絶滅が危惧される。

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目クワガタムシ科

ヒメオオクワガタ

Nipponodorcus montivagus (Lewis, 1883)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):中村唯史



選定理由

自然環境の良く保全された森林で記録されている。西日本では個体数は少なく、島根県での生息確認も少ない。

概要

体長オス31-47mm、メス27-32mm。体は光沢のない黒色。成虫は5-10月に見られる。県外の多産地ではヤナギに噛み傷を付け滲出する樹液を吸汁する行動が知られるが、島根県での採集例のほとんどは地面を歩行中のものである。灯火に飛来した個体も採集されている。成虫越冬する。幼虫はブナ等広葉樹の立枯れ、倒木の材中で生育する。生息地域は、本州、四国に分布。

●参考文献

林 成多・片岡大輔・宇木浩太・森 孝之 (2024) 大万木山における甲虫調査 (2021・2122)。ホンザキグリーン財団研究報告, 27: 55-86.
児玉 洋 (1984) 匹見産昆虫目録2. 匹見町の鞘翅目. すかしば, 22: 11-19.
高橋寿郎・淀江賢一郎 (1996) 島根県昆虫文献目録5. 島根県のコガネムシに関する文献目録. すかしば, 43/44: 27-41.

県内での生息地域・生息環境

三瓶山や、県西部の山地で少数の記録があったが、近年、県東部地域の生息が確認された。自然度の高いブナ林には広範囲で生息している可能性がある。

存続を脅かす原因

冷温帯の大径木を有する成熟した森林維持が必要と考えられる。このような森林の大規模開発による消失や、寸断化による生息環境の悪化。

(執筆者: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目コブスジコガネ目シ科

コブナシコブスジコガネ

Trox nohirai Nakane, 1954

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

成虫の記録が少なく、幼虫の育成場所が特殊である。

概要

体長5.5-6.7mm。体は長卵型で、強く膨隆する。背面は黒色で光沢がある。上翅の条溝内の点刻は強く、間室は強く膨隆し、短毛を密生したこぶや隆起を欠く。成虫は、4~10月に出現する。平地から山地にかけて分布し、おもに灯火で採集される。本種の幼虫はフクロウ等の鳥の巣で育成することが確認され、特殊な生育環境を必要とすることが判明している。朝鮮半島に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島に分布する。

参考文献

林 成多 (2010) 神戸川と斐伊川でのコブナシコブスジコガネの記録。すかしば, (58): 39.
 児玉 洋 (1984) 松江市でコブナシコブスジコガネを採集。すかしば, (22): 19.
 松田隆嗣 (2012) コブナシコブスジコガネを三瓶山で採集。すかしば, (59): 37.

県内での生息地域・生息環境

県東部の平地や山間地において灯火採集の記録がある。

存続を脅かす原因

フクロウの営巣場所の減少。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目センチコガネ科

オオセンチコガネ

Phelotrupes auratus (Motschulsky, 1857)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):鈴木謙治



選定理由

生息地が局限され、また、牛やシカの糞に依存しているため、これらの動物の減少によっては絶滅が危惧される。

概要

体長14-22mm。体上面はふつう金赤色から紫赤色で、金属光沢がある。センチコガネに似るが、頭楯は長めの台形。成虫は4~11月、おもに山地で発生する。牛、馬、シカなどの糞に集まる。メスは地中へ糞を埋めこんで産卵する。幼虫は糞を食べて育つ。シベリア、朝鮮半島に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島に分布する。

参考文献

近木英哉 (1963) 島根県の昆虫目録Ⅲ鞘翅目(コガネ目シ科)。島根農科大学研究報告, 12(A):24-31.
 近重克幸・福井修二・鈴木謙治・山崎克友 (1988) 鶴鷺半島・ホンシュウジカの糞に集まる食糞性コガネ目シ。すかしば, (30):45-48.
 鈴木謙治 (1994) 三瓶山の糞虫相。島根昆虫研究会「三瓶山の昆虫相とその保全」:164-170.
 高橋寿郎・淀江賢一郎 (1996) 島根県のコガネ目シに関する文献目録。すかしば, (43/44):27-41.
 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (1989) 「原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)」.514pp.保育社.

県内での生息地域・生息環境

三瓶山の和牛放牧地、島根半島西部のシカ生息地。

存続を脅かす原因

三瓶山における牧畜形態の変化。野生シカの生息域の森林伐採や、シカの捕獲などによるシカの個体数の減少。

(執筆: 鈴木 謙治)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目コガネムシ科

シナノエンマコガネ

Onthophagus bivertex Heyden, 1887

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

隠岐諸島の放牧地に生息するが、近年はまれになっている。

概要

体長7ー10mm。体は黒色で、上翅は褐色を帯び、光沢は鈍い。頭頂の隆起は、大型のオスでは長く伸びた牛角状の突起となり、メスでは横長でわずかに波曲した隆起になる。成虫は、6〜9月に出現し、山地の獣糞にあつまる。国外ではシベリア、中国、朝鮮半島に分布し、国内では本州、四国、九州に分布する。

参考文献

川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志(2006)「日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群」, 189pp. 昆虫文献六本脚。
島田 孝・門脇久志・山内健生(2009) 隠岐諸島の糞虫相(甲虫目:コガネムシ上科), 人と自然, (20): 93-106.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島(知夫里島)の放牧地に生息し、牛馬糞に依存しているが、個体数は少ない。

存続を脅かす原因

生息地での牧畜形態の変化。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目コガネムシ科

ミツノエンマコガネ

Onthophagus tricornis (Wiedemann, 1823)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

県内における生息地が限定されている。

概要

体長12ー18mm。黒色で光沢は鈍い。頭頂部に板状で両端が上方に突出する角状の隆起がある。前胸背板の前縁部中央は前方に鈍く太く突出する。成虫は、5〜11月に出現する。河川敷や海岸部に生息する。腐った魚肉に集まり、灯火にも飛来する。国外では中国、台湾、ジャワ、マレー半島、インドシナ、ミャンマー、インドに分布し、国内では本州、九州、香岐島に分布する。

参考文献

野津幸夫(1998) ミツノエンマコガネを島根県から初記録, すかしば, (46): 67.

県内での生息地域・生息環境

島根県東部に生息する。生息地は、畑地や裸地、疎林が混在する環境である。

存続を脅かす原因

裸地的な環境の消失。農業形態の変化。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目コガネムシ科

ニセマグソコガネ

Aegialia (Aegialia) nitida Waterhouse, 1875

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):鈴木謙治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地が局限されており、また、生息密度も少なく希少であるため。

概要

体長3.5—4.5mm。黒色で光沢があり、頭胸前縁、上翅合部、脚は赤褐色。背面は強く隆起する。眼は上面に出ない。上翅には細い条溝がある。体の腹面には、黄色の長毛を生ずる。成虫は、ほぼ通年見られる。本種は、きれいな砂浜のイネ科植物などの根際に生息している。日本固有種で、北海道、本州、九州に分布する。

参考文献

近木英哉 (1977) 浅利黒松海岸の昆虫。「島根県自然環境保全地域候補地学術調査報告書第4集」:②17-34。
野津 裕 (1978) 島根県の甲虫。すかしば, (9):9-12。
鈴木謙治 (2006) ニセマグソコガネの採集記録。すかしば, (54): 32。
高橋寿郎・淀江賢一郎 (1996) 島根県のコガネムシに関する文献目録。すかしば, (43/44):27-41。
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (1989) 「原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)」.514pp.保育社。

県内での生息地域・生息環境

県東部から西部の海浜植生の残された砂浜。

存続を脅かす原因

海浜の護岸工事、砂浜への車の乗り入れによる海浜植生の減少、松食い虫防除のための空中薬剤散布。

(執筆者:鈴木 謙治)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目 コガネムシ科

オオチャイロハナムグリ

Osmoderma opicum Lewis, 1887

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):皆木宏明

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

高標高地に形成された成熟した森林の老木等に依存する生活様式を持つ。採集記録は少なく、発達した森林の指標昆虫でもある。

概要

体長22—32mm。体は全体に黒褐色で銅色ないしは紫銅色の光沢を帯びる。成虫はジャコウのような独特の芳香を放つ。成虫は7~8月に出現する。高標高の自然環境の良好な森林に生息し、ブナ、ミズナラ等の立枯れ木、樹洞を形成するような老木に見られる。産卵はこれらの材の腐朽部に行われ、幼虫は腐朽部および樹洞内部の材が堆積した腐植土を摂食して育ち、繭を作り蛹化することが知られている。本州、四国、九州に分布。

参考文献

近木英哉 (1981) 「山陰の虫たち」.205pp. 近木英哉教授定年退官記念事業会。
加藤重和・椋木博昭 (2003) 安蔵寺山の甲虫。すかしば, 51: 1-8。
児玉 洋 (1984) 匹見産昆虫目録2。匹見町の鞘翅目。すかしば, 22: 11-19。
高橋寿郎・淀江賢一郎 (1996) 島根県昆虫文献目録5。島根県のコガネムシに関する文献目録。すかしば, 43/44: 27-41。
山田 学 (2003) 匹見町におけるオオチャイロハナムグリの採集記録。すかしば, 51: 16。

県内での生息地域・生息環境

県中部~西部の高齢大径木の残存するブナ帯森林で採集されている。倒木の腐朽部からも採取されている。県西部の中国山地は他地域に比較して採集例が多い。

存続を脅かす原因

樹洞を形成する高齢の成熟した森林の伐採等、生息環境の悪化・消失。(執筆者:福井 修二)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目コガネムシ科

アカマダラハナムグリ (アカマダラコガネ)

Anthrachophora (Poecilphilides) rusticola Burmeister, 1842

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)

撮影者(提供者): 福井修二



選定理由

これまで確認された分布は局所的で個体数も少ない。

概要

体長14—20mm。背面は赤褐色に不規則な小黑紋を有す。成虫は春～秋に活動する。平地から低山地の広葉樹林に生息する。晩夏から秋に新成虫が出現して越冬し、翌春に産卵が行われる。成虫は複数年生存するものがある。ナラ類の樹液に集まるほか、灯火に飛来した記録もある。藁ぶき屋根の藁や堆肥から採集されていた。大型鳥類との関わりが深く、近年、幼虫はカワウや猛禽類の巣中から採集され、動物質の栄養補給を受けて育つ幼虫は短期間で生育することが推察されている、国内では北海道、本州、四国、九州。海外では東アジア地域、中国やロシア極東から朝鮮半島に産する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県産甲虫目録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 4: 1-161.
 越山洋三・松田隆嗣 (2012) 松江市でアカマダラコガネを採集。すかしば, 59: 36.
 皆木宏明 (2017) 三瓶山で採集されたアカマダラハナムグリについて。島根県三瓶自然館研究報告, 15: 83-84.
 高橋寿郎・淀江賢一郎 (1996) 島根県昆虫文献目録5。島根県のコガネムシに関する文献目録。すかしば, 43/44: 27-41.
 山本正志 (2010) 滋賀県伊崎半島のカワウコロニーの巣でアカマダラハナムグリ発生。昆虫と自然, 45 (12): 37-39

県内での生息地域・生息環境

県東部の平地から山地にかけての森林で採集記録がある。

存続を脅かす原因

生息域の森林伐採や、大型鳥類の営巣場所の消失。

(執筆: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

ヨコミゾドロムシ

Leptelmis gracilis Sharp, 1888

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者): 公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

県内の分布は広いが、個体数の多い生息場所は局地的である。

概要

体長2.6—3.0mm。全体に黒色。上翅に黄色い縦スジの模様があるが、不明瞭。体はやや細長く、肩の隆起は不明瞭。前胸背板に顕著なくびれと横溝がある。触角は糸状で長い。上翅の点刻列は明瞭。肢は著しく長い。近縁種とされたホソヨコミゾドロムシは、本種の長翅型であることが判明した。幼虫は扁平で、日本産ヒメドロムシ科の中では特異な形態をしている。国内では本州、四国、九州に分布する。生活史が研究された数少ない日本産ヒメドロムシ科の一つで、幼虫は5齢と推定されている。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.
 林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
 Morimoto, R. and M. Hayashi (2020) Life cycle of an endangered riffle beetle, *Leptelmis gracilis* Sharp (Coleoptera: Elmidae), in the Hiikawa River system, Shimane prefecture, Japan. *Entomological Science*, 23: 445-452.
 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

県内では河川中下流域とため池で確認されている。長翅型は短翅型に比べて出現率が低い。溜池では短翅型のみが確認されている。

存続を脅かす原因

河川や溜池の改修、極端な渇水。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

アヤスジミゾドロムシ

Graphelmis shirahatai (Nomura, 1958)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



選定理由

県内での分布は局所的である。河川中下流域に生息するヒメドロムシで、全国的な希少種である。斐伊川下流の個体群は生息数が多く貴重である。

概要

体長3.4-3.7mm。全体に黄色だが上翅の点刻列に沿って黒条がある。体はやや細長く、肩は明瞭。前胸背板にくびれがない。触角は糸状で長い。上翅の点刻列は明瞭。肢が著しく長く、爪が大きい。成虫・幼虫共に水中に生息し、ヤナギ類などの流木を食べる。国内では本州に分布している。

参考文献

Hayashi, M. (2007) Ecological notes on the adult stage of *Graphelmis shirahatai* (Nomura) (Coleoptera, Elmidae). *Elytra*, Tokyo, 35 (1) : 102-107.
Hayashi, M. (2013) Descriptions of larva and pupa of *Graphelmis shirahatai* (Nomura) (Coleoptera, Elmidae). *Elytra*, New Series, 3 (1) : 53-63.

県内での生息地域・生息環境

県東部の河川に生息している。斐伊川下流の本流と神戸川中流の支流がおもな生息地である。とりわけ河畔林の発達する斐伊川は本種の生息にとって重要な条件であると考えられる。

存続を脅かす原因

流木の減少。極端な渇水。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

ケスジドロムシ

Pseudamophilus japonicus Nomura, 1957

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 II類(VU)



選定理由

水辺植生の豊かな河川に生息し、生息地における個体数が少ない。

概要

体長4.8-5.3mm。国内最大のヒメドロムシ。体は長い楕円形。全体に黒色または焦げ茶色。上翅に点刻列があり、間室に毛が生えている。河川の上流から下流まで広く生息する。成虫・幼虫ともに水中にある流木についていることが多い。成虫は灯火に飛来する。小型の幼虫は、川辺の水中に露出したツルヨシの根際にも生息している。幼虫期は2年以上と考えられる。日本固有種で、本州と九州に分布する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

県内では県東部や中部の河川に生息が確認されている。西部にも分布しているとみられる。隠岐諸島には分布していない。

存続を脅かす原因

流木の減少。極端な渇水。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

ハガマルヒメドロムシ

Heterlimnius hagai (Nomura, 1958)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

県内の分布は局地的である。また、河川における生息環境も特殊である。

概要

体長2.2-2.5mm。体は全体に楕円形で、背面側に著しく盛りあがる。黒色で光沢が強いが、上翅の基部と先端に黄褐色の紋がある。触角は糸状で長い。上翅の点刻列は条溝を伴う。日本固有種で本州、九州、隠岐諸島に分布する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。
外山祐紀 (2023) 島根大学三瓶演習林のヒメドロムシ類。島根県立三瓶自然館研究報告, (21): 35-37.

県内での生息地域・生息環境

県内では、県東部、中部、西部、隠岐諸島（島後）で確認されている。比較的流れが緩い細流で多産することがある。山地溪流で見つかることもあるが、個体数は少ない。離島での記録は隠岐諸島のみであり、生物地理学的に注目される。

存続を脅かす原因

河川改修、大規模な水害。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

セマルヒメドロムシ

Orientelmis parvula (Nomura & Baba, 1961)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 II類(VU)

撮影者(提供者):森本涼介



選定理由

個体数が少なく、人為開発などの影響を受けやすい河川本流の中流域に生息するため。

概要

体長1.5-1.6mm。成虫は黒色~黒褐色の背面で楕円形の体型。上翅に橙色を帯びた4つの斑紋をもつ。幼虫は体が暗橙色で黒色の斑紋もち、前胸背面の前方半分が明橙色で目立つ。岸部が砂礫質の河川本流域において、河岸に生えるツルヨシやスゲ属などの流水中に露出した根の間隙に生息する。成虫と幼虫は同所的に見られる。国内では本州、九州に分布する。

参考文献

林 成多 (2020) 改訂 島根県の水生甲虫 (2)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (28): 1-76。
森本涼介 (2022) 島根県に生息するセマルヒメドロムシ (コウチュウ目: ヒメドロムシ科) の分布。ホシザキグリーン財団研究報告, (25): 251-255.

県内での生息地域・生息環境

県内各地の水質が良好な河川中流域で局所的に分布し、砂礫質の河岸に生えるツルヨシやスゲ属の根の間隙から見つかったり。

存続を脅かす原因

本種の生息地は一般的に不安定であり、環境の維持には適度なく乱が必要であるが、集中的な開発や大雨の影響により環境の悪化が懸念される。

(執筆: 森本 涼介)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目 ジョウカイモドキ科

イソジョウカイモドキ

Laius asahinai Nakane, 1955

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



選定理由

海岸の岩礁に生息するが、生息地は少ない。本州の日本海側での記録が少なく、貴重な個体群である。

概要

体長4.5—5.0mm前後。背面は黒青色で弱い金属光沢があり、触角の基半分は赤褐色。上翅は微細な印刻があり、オスの触角第3節は肥大する。海岸性で本州、四国、九州、屋久島に分布し、成虫は5月ごろから夏にかけて汀線の岩礁に見られる。太平洋側では潮間帯に生息するが、日本海側では潮位変化が少ないため、潮上帯に生息する。

参考文献

端山 武 (2010) 島根県におけるイソジョウカイモドキ (コウチュウ目ジョウカイモドキ科) の採集記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (13): 151-154.

林 成多 (2015) 島根県の海岸に生息する昆虫. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (14): 1-120.

林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵 (2013) 隠岐諸島における昆虫類分布調査 (2009-2012年調査のまとめ). ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (8): 1-73.

Yoshitomi, H. and C.-F. Lee (2010) Revision of the Taiwanese and Japanese species of the genus *Laius* (Insecta: Coleoptera: Malachiidae). Zoological Studies 49(4): 534-543.

県内での生息地域・生息環境

1960年、浜田市福井の岸から離れた岩礁の割れ目で、水際に群棲していた本種が採集されたのが唯一の記録であったが、2008年以降の調査で島根半島から大田市琴ヶ浜までの岩礁帯や隠岐(島後)の岩礁で確認された。高波時には波に覆われるような岩礁の波打ち際の隙間などで採集されている。

存続を脅かす原因

岩礁の大規模工事、油や漂流物による環境の悪化。

(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目 オオキノコムシ科

オオキノコムシ

Encaustes praenobilis Lewis, 1883

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

分布は局地的で個体数も少ない。

概要

体長16—36mm。長楕円形。光沢のある黒色で前胸、上翅肩部および翅端にオレンジ色の斑紋がある。成虫は夏季にブナ林中の大径枯死木・倒木に発生したサルノコシカケ等の多孔菌類を食べるほか、アミスギタケ、ハチノスタケ、ツリガネタケに集まる。また、灯火にも飛来することが観察されている。幼虫は多孔菌類の子実体中や、これら菌糸が蔓延した材部で見つかる。北海道、本州、四国、九州に分布。

参考文献

福井修二 (1990) 赤来町でオオキノコムシを採集. すかしば, 34: 17.

林 長閑 (1986) 「甲虫の生活」, 177pp. 築地書館.

加藤重和・椋木博昭 (2003) 安蔵寺山の甲虫. すかしば, 51: 1-8.

山田 学 (2004) 西中国山地のオオキノコムシ類の採集・観察記録. すかしば, 52: 11

県内での生息地域・生息環境

県東部～西部の中国山地の冷温帯林において記録があり、いずれもブナ大径木が多い場所に限定されている。県西部では他地域に比較して採集記録が多い。

存続を脅かす原因

本種の生息環境であるブナの大木を有する成熟した林分の伐採や、道路開設等による生息林の寸断など、森林の乾燥化などによる多孔菌類の発生減少。

(執筆: 福井 修二)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目テントウムシ科

マクガタテントウ

Coccinula crotchi (Lewis, 1879)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 津下麻樹

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

—



選定理由

河川敷などの荒地に生息する日本固有のテントウムシ。島根県は分布の西限にあたる。生息地は人為の影響を受けやすい環境であり、河川敷環境の生物多様性の指標として選定した。

概要

体長約3-4mm。背面は黒色で、特徴的な橙色斑を有する。北海道や東北では比較的普通だが、西日本では分布は局地的。北海道では年1世代、西日本では2世代を経過し、越冬後成虫の発生量は少ない。発育には温帯性種としては高い温度(約14℃以上)を要求する。近年の酷暑は個体群を衰亡させている可能性がある。

参考文献

星川和夫・津下麻樹(1998) 西日本におけるマクガタテントウの生活史-分布南限における気候適応の破綻-, 中国昆虫, (12): 31-35.

県内での生息地域・生息環境

斐伊川中流域には比較的高い密度の個体群が確認されている。その他、江の川や高津川の河川敷、三瓶山、さらに、鳥取県の弓ヶ浜でも分布が確認されていたが、現状は不明。

存続を脅かす原因

河川敷の大規模な土地利用改変により環境が画一化すると個体群が消滅する。また、南西限界付近の個体群として、地球温暖化の影響により気候適応が破綻する可能性がある。

(執筆: 星川 和夫)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目カミキリムシ科

フタスジカタビロハナカミキリ

Brachyta bifasciata japonica (Matsushita, 1933)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 氏原靖志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

ヤマシャクヤクを繁殖源とし、生息域も限定され個体数も少ない。

概要

体長16-23mm。頭部と胸部は黒色。上翅は黄色で端と前方に二筋の黒色横帯を持つ。成虫は4月下旬から5月上旬に山地に咲くヤマシャクヤクに訪花し、花弁や花粉を摂食する。地表の枯れ枝、枯れ草の茎などに産卵され、孵化した幼虫は土中に潜り根茎を食入し成長すると再び土中に出て土繭を作って蛹となるという。本州、四国、アジア北東部、シベリア、朝鮮半島に分布。

参考文献

藤田 宏(2007) 島根県・隠岐島後のハナカミキリ2種。月刊むし, 454: 11.
船城保明(1988) 島根県未記録のカミキリ2種。すかしば, 29: 12.
板倉宏文(1984) フタスジカタビロハナカミキリを採集。すかしば, 22: 25.
氏原靖志(2024) 島根県内で2023年に確認した主なカミキリ。すかしば, 71: 1-14.
山本正志(2020) 島根県奥出雲町及びその周辺の昆虫類の採集及び観察。すかしば, 67: 51-55.

県内での生息地域・生息環境

5月に県東部から西部の山地のほか、隠岐(島後)において記録がある。ヤマシャクヤクの開花時期に訪花しているものや、飛翔中の個体が採集されている。

存続を脅かす原因

ヤマシャクヤク自生地を含む、本種の生息域周辺森林の伐採等による生息地域の環境悪化。寄主植物であるヤマシャクヤクの乱獲。

(執筆: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目カミキリムシ科

オオホソコバナカミキリ

Necydalis solida Bates, 1884

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 氏原靖志



選定理由

ブナ林に生息し、分布は局所的で個体数も少ない。西中国山地の自然度の高いブナ林で採集されている。

概要

体長18—30mm。体は黒色で、上翅は黒色から明るい赤褐色まで変化がある。上翅は短く後翅、腹部が露出する。成虫は7~8月に出現する。産卵対象木であるブナ等の立枯れに産卵、交尾のため集まっているところを観察されることが多い。まれに花に飛来することも記録されている。産卵対象木は、ブナ、シデ類、カエデ類など各種の広葉樹を餌とすることが記録されているが、特にブナを好む。幼虫はこれらの材を摂食する。本州、四国、九州に分布。

参考文献

加藤重和・椋木博昭(2003) 安蔵寺山の甲虫。すかしば, 51: 1-8.
日本鞘翅目学会編(1984) 「日本産カミキリ大図鑑」 565pp. 講談社。
氏原靖志(2024) 島根県内で2023年に確認した主なカミキリ。すかしば, 71: 1-14.

県内での生息地域・生息環境

島根県西部の中国山地のブナ立ち枯れから採集されている。

存続を脅かす原因

開発等による生息域のブナ林の伐採。

(執筆者: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目 カミキリムシ科

ヨコヤマヒゲナガカミキリ

Dolichoprosopus yokoyamai (Gressitt, 1937)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 氏原靖志



選定理由

本州、四国、九州に分布するが個体数は少ない。ブナ林に依存する種で、本県では生息に適したブナ大径木が多く残存する環境は少ない。

概要

体長20—30mm。体は黒色で背面に灰白色の微毛を持ち、霜ふり状の斑紋、帯状紋を形成している。成虫は7—9月に出現し、ブナ、イヌブナ生立木の樹皮を後食する。夜行性でブナの大径生立木の幹上に集まることがや日中根元の落葉樹下に潜むこと、また灯火へ飛来も観察されている。成虫の脱出孔はブナ生立木の地際部や、幹の衰弱部に多く観察されている。本州、四国、九州に分布。

参考文献

藤村俊彦(1966) 島根県のカミキリムシ。比和科学博物館研究報告, 9: 9-17.
島根県昆虫研究会編(1994) 「三瓶山の昆虫相とその保全」, 221pp.
氏原靖志(2020) 島根県民の森付近のカミキリ。すかしば, 67: 80-82.
氏原靖志(2023) 島根県東部県境付近の山及び三瓶山のカミキリの記録。すかしば, 70: 43-47.

県内での生息地域・生息環境

県西部、中部の記録のみであったが、近年、県東部でも確認された。

存続を脅かす原因

本種の生息地域において、食樹であるブナ・イヌブナを含む森林伐採によって、食樹が失われることや、環境変化による森林衰退。

(執筆者: 福井 修二)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ハムシ科

キンイロネクイハムシ

Donacia japana Chujo et Goecke, 1956

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



■ 選定理由

食草であるミクリ属の生えるため池や水路などが減少しており、それに伴い生息地も減少している。

■ 概要

体長7mm前後。体全体に金銅色を帯び、上翅に赤または青色の斑紋がある。ヤマトミクリやヒメミクリなどを食草としており、成虫は抽水葉を食べ、幼虫は地下で根を食べる。成虫はおもに5~6月に出現するが、9月に見られることがある。日本固有種で北海道、本州、九州に分布する。

●参考文献

Hayahi, M. (2020) Revision of extant and fossil Donaciinae (Coleoptera: Chrysomelidae) of Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, Supplementary Series, (2): 61-159.

林 成多 (2012) 「月刊むし・昆虫図説シリーズ2 日本のネクイハムシ」94pp. むし社, 東京.

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部や西部のミクリ属の生えるため池や休耕田などに生息している。生息地では個体数が多く、ミクリの葉には食痕がみられる。

■ 存続を脅かす原因

ミクリ類の減少。生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

コウチュウ目ハムシ科

スゲハムシ

Plateumaris sericea (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



■ 選定理由

湿地に生息する北方系のハムシで、県内での分布は局地的である。

■ 概要

体長7-9mmで体全体に金属光沢がある。成虫は5~6月に出現し、スゲなどの花に集まり花粉を食べる。幼虫はスゲ類の根を食害する。ヨーロッパから日本まで、旧北区に広く分布する。国内では、北海道、本州、九州、佐渡などに分布する。北海道や本州東部ではもっとも普通にみられるネクイハムシであるが、西日本での分布は局地的で、中国山地の個体群は希少性が高い。近縁種のシラハタネクイハムシは、西日本には分布していないとされてきたが、近年兵庫県で発見された。

●参考文献

Hayahi, M. (2020) Revision of extant and fossil Donaciinae (Coleoptera: Chrysomelidae) of Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, Supplementary Series, (2): 61-159.

林 成多 (2012) 「月刊むし・昆虫図説シリーズ2 日本のネクイハムシ」94pp. むし社, 東京.

■ 県内での生息地域・生息環境

県内では、県中部の湿原で確認されているが、本州での分布の西限となっている。広島県との県境付近の湿地でさらに発見される可能性がある。

■ 存続を脅かす原因

湿原の自然遷移や乾燥。気候の温暖化。
(執筆: 林 成多)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目メバエ科

ムネグロメバエ

Conops opimus Coquillett, 1898

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):前田泰生



選定理由

国内では、採集個体数がきわめて少ない寄生性種である。

概要

体長はメスが12-18mm、オスが12-17mm。メバエ類のなかでは大型種である。個体の大小差は、寄主サイズに由来すると考えられる。全体が茶褐色を呈する。両複眼の内縁部には、それぞれ1個の黒点がある。最近の大社砂丘における調査によると、オオズグロメバエよりも早く出現し、活動期間は5月中旬から7月上旬である。寄主は、ヒメハナラナグツチバチと推定される。寄主がよく訪花するハマヒルガオの花の周辺で待ち伏せが見られる。国内では本州・九州に、国外では中国・韓国にも分布している。

参考文献

前田泰生 (2006) 島根県産のメバエ類採集記録。すかしば, (54): 1-6.
前田泰生 (2012) 島根県産メバエ類の採集記録補遺。すかしば, (59): 1-2.
宮永龍一・清水加那。平田守嗣 (2020) 隠岐諸島におけるメバエ類の採集記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 218.

県内での生息地域・生息環境

松江市と大社砂丘(出雲市)のほか、隠岐島前(西ノ島)で採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

(執筆者:前田 泰生)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目マダラガ科

ヤホシホソマダラ

Balataea octomaculata (Bremer, 1861)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):三島秀夫



選定理由

生息地および生息環境が限定され、個体数も少ない。

概要

開張16-21mm内外。ハチに似た蛾である。触角はオスが両櫛歯状、メスが糸状。前翅は暗褐色で8個の黄色い紋がある。後翅は半透明。成虫は年に2回、6月および8月に出現するといわれる。国内では、北海道、本州、四国、九州、対馬、国外では、朝鮮半島南部、中国、ロシア南東部に分布する。生息地は明るい草原で、また、湿地を好むという話もあるが、県内ではその傾向は確認されていない。成虫は日中に花を訪れるなどの活動をする。幼虫の寄主植物はササ、タケなど。

参考文献

林 成多 (2015) ヤホシホソマダラを斐伊川河川敷で撮影。すかしば, (62):22.
広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝 (編) (2013) 日本産蛾類標準図鑑3.学研教育出版.東京.
三島秀夫 (2020) 島根県で採集されたガ数種について。島根県立三瓶自然館研究報告, (18):83-87.

県内での生息地域・生息環境

出雲市と雲南市の斐伊川河川敷、県中部、三瓶山の草原に記録がある。ただ、道路わきのちょっとした草地でも見つけることがあるので、生息地はもう少し多いと思われる。

存続を脅かす原因

明るい草原、草地の減少、消滅。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目マダラガ科

オキナワリチラシ

Eterusia aedeia sugitanii Matsumura, 1927

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):八幡浩二

島根県固有評価

分布限界種(北限)

環境省カテゴリー

—



選定理由

南方系で隠岐(島後)では、古くから生息が知られ分布上注目されている。隠岐諸島の昆虫相を特徴づける重要種である。

概要

開翅長60—70mm。日本本土亜種は年1化で比較的大型。国内では、本州(伊豆半島以西)、四国、九州、対馬などに分布し、緑色に白い斑紋のある美麗種で、8~9月に出現する。広島県安佐町では著しく黒化した個体が採集され、山口県でも採集されている。八重山諸島には各別亜種が分布する。

参考文献

門脇久志(1974) Longicorn読後雑感・隠岐島の昆虫に関連して。すかしば, 1:1-3.
三宅恒方(1908) 隠岐島ノ昆虫相ニ就イテ。日本昆虫学会報, (2)8:182-186.
山田 学(2001) 匹見町におけるオキナワリチラシの発見。すかしば, 49:19.

県内での生息地域・生息環境

隠岐(島後)の山地・丘陵地に生息し個体数も比較的多い。島前の知夫里島に記録があるが再確認が必要である。メスは昼にソバなどの白い花に来るが、夜灯火に飛来するのはオスだけである。山陰本土側では、1997~2000年に益田市匹見町で採集されている。幼虫の食樹はヒサカキ・ツバキなどである。

存続を脅かす原因

幼虫の食樹のヒサカキは多いが、蜜源のソバ畑が減少しており、発生量に影響するか否か要観察。

(執筆者:八幡 浩二)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目アゲハモドキガ科

フジキオビ

Schistomyia funeralis Butler, 1881

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内での生息地が極めて局地的。個体数も多くない。

概要

開張25—29mm。オスの触角は櫛歯状、メスは微毛状。翅は黒の地色に、クリーム色から黄色に近い大きな模様を規則正しく並べているのが特徴。全体的に明るい色彩をもっている。日中に活動する蛾で、よく花に集まる。成虫の発生は年に一度、6月ごろ。飛び方がタテハチョウ科のミスジチョウ類に似ている。幼虫はナツツバキにつき、蛹で越冬するといわれる。本州の関東地方以西、四国、九州に分布する。

参考文献

門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘(1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば, (37/38):1-44.
岸田泰則(編)(2011) 日本産蛾類標準図鑑1。学研教育出版。東京。
三島秀夫(2002) 蛾の記録3つ。すかしば, (50):76。
能美 豪(2014) 2013年の採集記録-ギフチョウの斑紋異常, ゴマシジミの異常型, シルピアシジミの異常型, フジキオビほか。すかしば, (61):32-33。

県内での生息地域・生息環境

県東部と中部のいずれも中国山地沿いのごく限られた地域に生息地があるに過ぎない。産地の雑木林や周辺に広がる草原などが主な生息場所と考えられる。

存続を脅かす原因

山地の良好な森林やそれと併存する環境(草原など)の減少、消滅。(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シャクガ科

シロシモフリエダシャク

Biston melacron Wehrli, 1941

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):三島秀夫



■ 選定理由

県内での生息地が限定され、日本全国で見ても、その分布が局地的である。

■ 概要

開張42—53mm。大きさにはかなり個体差がある。白い翅に特徴ある黒い斑紋を散らしたエダシャクで、黒い斑紋にも変異がある。成虫は早春にのみ現れる。中国地方、四国、九州、対馬に分布。国外では台湾、朝鮮半島、中国に分布するとされる。生活史などについては不明な点が多く、幼虫の寄主植物も未知。また、メスはほとんど灯火に飛来しないという。

● 参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑1.学研教育出版.東京.

松井祐樹・山岸瑞樹・中 秀司(2025)山陰両県におけるシロシモフリエダシャクの記録.すかしば,(72):36.

■ 県内での生息地域・生息環境

最近の調査で、県内の生息地は、東部の海岸近くの低地から県中部の三瓶山周辺を経て、西部中国山地沿いの地域と隠岐諸島西ノ島まで広がった。しかし、個体数は多くない。

■ 存続を脅かす原因

生息環境などを含め不明な点が多いので、まだ調査が必要だが、雑木林を含む森林の消滅が考えられる。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤママユガ科

クロウスタビガ

Rhodinia jankowskii (Oberthur, 1880)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大畑純二



■ 選定理由

県内での産地が限られ、個体数がきわめて少ない。

■ 概要

開張85mm内外。明るい黄色の翅をもつ近縁種ウスタビガ*Rhodinia fuax* (Butler, 1877)を黒っぽくしたようなヤママユである。まさに名前のとおり。ウスタビガは翅の色や形などが、オスとメスとでは著しく異なっているのに対し、本種はほぼ同じである。前後翅にそれぞれ透きとおった三日月型の紋をもつ。成虫は年に一回、秋に出現。幼虫の寄主植物はキハダ。寒冷地の種で北海道から本州北部にかけては少なくないといわれるが、西日本では稀種となる。北海道、本州、四国、九州に分布。国外では朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布する。

● 参考文献

星川和夫(1994)瑞穂町の蛾類群集。島根県特定地域野生生物緊急調査報告。瑞穂町の昆虫類:68-71.

門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘(1992)島根県で採集された蛾類目録.すかしば,(37/38):1-44.

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑1.学研教育出版.東京.

大畑純二・三島秀夫(1999)三瓶産昆虫標本目録。島根県立三瓶自然館収蔵目録第4号.

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部の中国山地沿いと中部の三瓶山、大万木山周辺から邑南町にかけて生息地がある。

■ 存続を脅かす原因

良好な落葉樹林帯および里山的環境の減少や消滅。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目スズメガ科

スキバホウジャク

Hemaris radians (Walker, 1856)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

全国的に減少傾向にあるとされる種。県内でも記録は少ない。

概要

開張40—45mm。翅は透明で黒く縁どられる。後翅の基部から後角にかけては橙色に染まる。体色は全体的に橙色で腹部に黒帯がある。昼行性の蛾で、日中によく花を訪れる。成虫は年に2回ほど、5月から9月にかけて発生する。幼虫の寄主植物は、スイカズラ科のオミナエシ、オトコエシ、スイカズラ、アカネ科のアカネなど。国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に、国外では、朝鮮半島、中国北部、シベリア、モンゴルに分布する。

参考文献

林 成多・片岡大輔・大谷隆起(2024) 島根県雲南市木次町尺の内公園における訪花性昆虫調査(2022年)。ホシザキグリーン財団研究報告,(27):13-46.
門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘(1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば,(37/38):1-44.
岸田泰則(編)(2011) 日本産蛾類標準図鑑1.学研教育出版,東京。

県内での生息地域・生息環境

県東部・中部・西部の山間地で記録がある。隠岐諸島からも記録があるが、別種の誤同定の可能性がある。

存続を脅かす原因

草原などの草地環境の悪化、減少。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヒトリガ科

ネズミホソバ

Pelosia angusta (Staudinger, 1887)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):松田隆嗣

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

本州における分布が局地的であり、一般的に個体数も少ない。県内における分布は局地的であり、既知の生息地のほとんどが開発等の影響を受けやすい平地の湿地や里山周辺である。

概要

開張16—17mm程度の小型種である。生態についての知見は乏しく不明な点が多い。寄主植物は不明であるが、同属種では地衣類や苔類を摂食することが知られている。

国内では1906年に隠岐(島後)の西郷で初めて確認された。その後、北海道、本州、対馬から記録されているが、分布は局地的である。中国地方では島根県、鳥取県、岡山県からの記録がある。隠岐(島後)では1967年以降の記録が無い。国外ではシベリア南東部、サハリンに分布する。

参考文献

門脇久志・岸田泰則(1977) 隠岐島の蛾(Ⅰ)。蛾類通信,(90):489-496.
岸田泰則(編)(2011) 日本産蛾類標準図鑑2.416pp.学研教育出版,東京。
松田隆嗣(2017) 島根県におけるネズミホソバの再発見。すかしば,(64):6-7。

県内での生息地域・生息環境

県東部、県中部、隠岐(島後)。県東部では主に平地および里地の湿地周辺で確認されている。

存続を脅かす原因

生息地周辺の林地、植生など自然環境の改変。

(執筆者:松田 隆嗣)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

クロシモフリアツバ

Lophomilia kogii (Sugi, 1977)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):三島秀夫



選定理由

国内ならびに県内における生息地がきわめて限定される。また、本県赤名峠産の個体が模式標本となっている。

概要

開張30mm内外。触角はオスでは葉片状、メスでは糸状。前翅は茶色、灰白色、黒などが混じりあった複雑な斑紋を有するが、後翅は茶色の無地である。成虫は県内の例でいうと6—8月にかけて発生。幼虫その他については、今のところ不明である。本種は1977年に北海道産のオスと本県赤名峠産のメスをもとに新種記載されたもので、1属1種。寒冷地に産するとされ、北海道、本州に分布するが、局地的で、個体数も多くない。国外では朝鮮半島に分布する。

参考文献

門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘 (1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば。(37/38):1-44.
岸田泰則 (編) (2011) 日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.
三島秀夫 (2020) 島根県で採集されたガ数種について。島根県立三瓶自然館研究報告.(18):83-87.
三島秀夫 (2020) 大田市の蛾類。島根県立三瓶自然館研究報告.(18):89-118.

県内での生息地域・生息環境

県中部の三瓶山周辺および赤名峠で採集されている。三瓶の例を見る限り、雑木林の蛾との印象が強い。

存続を脅かす原因

雑木林を含む森林環境の減少、消滅が考えられる。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

ヒメシロシタバ

Catocala nagioides Wileman, 1924

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):三島秀夫



選定理由

全国的な減少が懸念される種。県内でも生息地が限られる。

概要

開張48—57mm内外。コシロシタバによく似た翅の地色が黒い *Catocala* である。前翅はコシロシタバよりやや細く、白くこすれたような印象で、斑紋は不明瞭。後翅もコシロシタバと同じく白い斑紋を有するが、やや小さい。成虫は年一回、6月ごろから出現し10月まで見られる。幼虫の寄主植物はカシワ。国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に、国外では、朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布する。

参考文献

星川和夫 (1994) 瑞穂町の蛾類群集。島根県特定地域野生生物緊急調査報告。瑞穂町の昆虫類:58-71.
門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘 (1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば。(37/38):1-44.
岸田泰則 (編) (2011) 日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.
三島秀夫・門脇久志・大浜祥治 (2019) 隠岐諸島の蛾類 (II)。すかしば。(66):49-100.

県内での生息地域・生息環境

幼虫の食べ物であるカシワの分布と生息域が重なるように思われるが、見つかっているのは県中部の三瓶山から邑南町および西部の山地である。また、隠岐諸島で採集された1個体を確認している。

存続を脅かす原因

カシワを含む良好な森林、雑木林などの減少、消滅。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

コシロシタバ

Catocala actaea Felder & Rogenhofer, 1874

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

県内での生息地が限定され、さらに減っていく傾向にある。

概要

開張50—60mm内外。翅の地色が黒い*Catocala*で、後翅に細長い白色の斑紋を有する。成虫は年に一度、6月おわりごろから出現、秋まで姿が見られる。幼虫はクヌギなどブナ科を寄主植物としている。北海道、本州、四国、九州に分布しているが、数は少ない。国外では、朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布する。

参考文献

林 成多・片岡大輔(2019) 島根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園における蛾類生息調査(2015年)。ホシザキグリーン財団研究報告,(22):35-44。
門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘(1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば,(37/38):1-44。
岸田泰則(編)(2011) 日本産蛾類標準図鑑2。学研教育出版。東京。
松田隆嗣(2013) 松江市街地で採集された蛾類の記録。すかしば,(60):1-16。
野津幸夫・耕平・雅陽・朔太郎(2024) 松江市本庄町近辺で採集した興味ある昆虫～古い標本箱からのノスタルジア～。すかしば,(71):80-104。

県内での生息地域・生息環境

低地の落葉二次林を主たる生息場所とし、県東部および西部の山口県に近い限られた地域にのみ見られると考えられていたが、全県的に、時に市街地の裏山のようなところにも少数ながら見いだせることが分かった。

存続を脅かす原因

クヌギをふくむ落葉二次林や里山的環境の減少や消滅など。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

ホンバミツモンケンモン

Cymatophoropsis unca (Houlbert)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内の生息地が限定され、国内他地域でも同様に産地は限られる。

概要

開張30—32mm。前翅にある白く縁どられた3つの斑紋が鮮やかで、特徴的である。成虫の出現は、県内では5月から8月にかけて。幼虫はネコノチチを寄主植物とすることが、近年判明した。国内では本州(中国地方)、四国、九州に分布する。生息域は狭い。国外では、朝鮮半島、中国、チベットに分布する。同属で本種と非常によく似たミツモンケンモン*Cymatophoropsis trimaculata* (Bremer, 1861)は、本州北部に産するが、国内での絶滅が懸念されている。

参考文献

岸田泰則(編)(2011) 日本産蛾類標準図鑑2。学研教育出版。東京。
野津幸夫(1997) ホンバミツモンケンモンを島根県から初記録。すかしば,(45):82。

県内での生息地域・生息環境

県東部の島根半島および雲南市、出雲市、県西部の益田市(旧匹見町周辺)で見つかっている。本種と石灰岩質土壌に固有の植生と関係が再三指摘されているが、県内においては関係は薄いと思われる。

存続を脅かす原因

良質な林の減少、消滅。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

クビグロケンモン

Acronicta digna (Butler, 1881)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):三島秀夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

県内での生息地が極めて局地的である。

概要

開張43—47mm。前翅に特異な斑紋を持つ。体、翅の大きさにはかなりの個体差がある。成虫は4～5月と7～8月に出現する。春に出るものは翅の斑紋は鮮明だが、色は全体に白っぽく、後翅は白に近くなる。夏に出るものは強く黒みを帯びる。幼虫の寄主植物としては、カキツバタ、イタドリが報告されている。*Viminia*属はケンモンヤガ類としては珍しく、寄主植物が非樹木性で灌木や草本につくという。国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に、国外では台湾、朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布する。

参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.

野津幸夫・耕平・雅陽・朔太郎(2024)松江市本庄町近辺で採集した興味ある昆虫～古い標本箱からのノスタルジア～.すかしば,(71):80-104.

県内での生息地域・生息環境

生息地は三瓶のみと思われていたが、最近、松江市でも記録されていたことが分かった。今、全国で失われる傾向にある湿地環境に生息するとされ、三瓶では池のカキツバタなどとの関係が考えられる。

存続を脅かす原因

湿地環境およびそれに付随する植生の消失。

(執筆者:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

クビジロツメヨトウ

Oncocnemis campicola Lederer, 1853

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内の採集記録は、2008年の隠岐(島前)における1カ所2例のみで、その後報告はない。全国的にも分布は局所的。

概要

開張31—34mm。前翅は暗い紫灰色、後翅は茶褐色で基部は淡色。和名の由来は、首部の白色毛と前脛節末端にある爪による。全国の既知産地はいずれも石灰岩地や断崖等露岩地であり、県内では隠岐諸島の海岸崖部のほか、本土部の立久恵峡、断魚溪などで生息の可能性が高い。食樹はバラ科シモツケ属とされ、食草を同じくするホシミスジの記録地を狙った調査が有効と思われる。

参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑II.学研教育出版.東京.

三島秀夫・大浜祥治(2009)隠岐諸島の蛾類(I).すかしば, 57:44-104.

県内での生息地域・生息環境

西ノ島町の摩天崖で10月に2例記録されている。隠岐諸島のホシミスジはミツバイワガサを食草としており、本種も同様と推測される。

存続を脅かす原因

断崖等露岩地の荒廃、生息地への農薬散布等。

(執筆者:大浜 祥治)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

トビロアカガネヨトウ

Euplexia albilineola (Wileman & South, 1918)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):三島秀夫



選定理由

県内での生息地が局限され、このさき最も失われやすいと思われる湿地環境に生息すると考えられるため。

概要

開張30mm前後。前翅は銅色の地に白く縁どられた腎状紋と環状紋、さらには白い内外横線とで印象的な模様を形作っている。成虫は9~11月にかけて、湿地で見つかることが多いという。年に一回だけ発生すると思われるが、幼虫期、寄主植物などについては未知。本州(福島県以南)、四国、九州に分布する。今のところ日本固有種。成虫の発生時期が遅いこと、生息環境が湿地に限られるらしいことなどから、記録の少ない種であるという。

参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.
三島秀夫(2011)注目すべき島根県のが数種2010. 島根県立三瓶自然館研究報告, (9):103-105.

県内での生息地域・生息環境

県中部の三瓶山周辺で1例記録があるのみ。採集地は川のほとりで、水生植物も繁茂している。

存続を脅かす原因

湿地環境の減少、消滅が考えられる。

(執筆:三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

ヨスジキリガ

Eupsilia strigifera Butler, 1879

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):小山凜斉



選定理由

県内での生息地が限定され、確認された個体数も少ない。

概要

前翅長15mm前後。前翅は黄褐色で、外縁は波状を呈し、ほぼ平行に並ぶ4本の横線をもつ。年1化性で、成虫は晩秋から翌年の春にかけて出現する。野外での寄主植物は未知であるが、飼育下ではクヌギを摂食した例がある。国内では、本州、四国、九州、対馬に、国外では、台湾、朝鮮半島、中国、ネパールに分布する。

参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.
小山凜斉(2025)島根県におけるヨスジキリガの記録.すかしば, 72: 34.
三島秀夫(2023)島根県で採集されたガ数種について2022. 島根県立三瓶自然館研究報告, 21: 77-82.
大畑純二・三島秀夫(2023)三瓶産昆虫標本目録(III). 島根県立三瓶自然館収蔵資料目録第7号.
四方圭一郎(2015)冬ヤガ類(モクメキリガ亜科, キリガ亜科, ヨトウガ亜科)幼虫の寄主植物について. 蛾類通信, (276): 18-22.

県内での生息地域・生息環境

中部、東部の山地で発見されている。県内の生息地の環境はいずれも落葉樹林。

存続を脅かす原因

良好な森林環境の減少や消失。

(執筆:小山 凜斉)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目ヤガ科

ナマリキリガ

Orthosia satoi Sugi, 1960

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

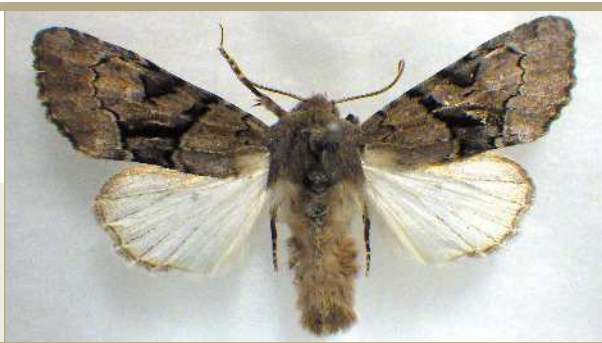
島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 林謙次郎



選定理由

全国的に、産地、個体数ともに少ない。

概要

開張38—38mm。前翅は紫灰色の地色に太い帯状の黒色紋がある。成虫の発生は4月、年に一度だけである。本種が属する*Orthosia*属は、北半球温帯の広葉樹林に多くの種が生息するといわれ、国内には20種ほどが知られている。いずれの種も春にのみ成虫が出現し、同じような生活サイクルを持っている。本種は日本固有種。東北地方から本州中部にかけて産地があるが、局地的、個体数も少ない。幼虫の寄主植物や生態などに関しても未知の部分が多い。

参考文献

岸田泰則(編)(2011)日本産蛾類標準図鑑2.学研教育出版.東京.
大畑純二・三島秀夫(2000)三瓶産昆虫標本目録(Ⅱ).島根県立三瓶自然館収蔵目録第5号.

県内での生息地域・生息環境

従来西日本には生息記録が見当たらなかった種だが、1999年に三瓶山で見つかった。現在までのところ、採集例はこの1例のみ。三瓶山の落葉樹林を生息場所としていると考えられる。

存続を脅かす原因

三瓶山など、落葉樹林帯の減少や消滅。

(執筆者: 三島 秀夫)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目セセリチョウ科

ヘリグロチャバネセセリ

Thymelicus sylvaticus sylvaticus (Bremer, 1861)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 筆谷憲一



選定理由

分布状況は不明確で、個体数も多くない。さらなるデータが必要。

概要

翅長13—14mm。国外ではロシア沿海州、朝鮮半島、国内では北海道から九州まで見られるが、西日本では産地は局所的である。

参考文献

山本正志(2005)島根県中部地域(江の川流域)における岩場の蝶(ホシミスジ・ウラナミジャノメ・ヘリグロチャバネセセリ)の採集及び観察記録.すかしば,(53):23-25.
淀江賢一郎(1983)隠岐(島後)でヘリグロチャバネセセリとアカシジミを採集する.すかしば,(20):56.

県内での生息地域・生息環境

海岸沿いの岩場の草付きや、立久恵峡、千丈溪などの崖地が主要な生息地である。河川沿いの林道脇の草地に生息する近似種スジグロチャバネセセリとは生息環境がまったく異なっている。隠岐諸島・島後の海蝕崖の草付きでも見られるがきわめて稀。6月上旬から発生し、草付きを急速に飛び回り、ゆったりと飛ばすスジグロチャバネセセリとは生態も異なる。

存続を脅かす原因

露岩地の過度な整備(大規模なコンクリート吹き付け)。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目アゲハチョウ科

ジャコウアゲハ

Atrophaneura alcinous (Klug, 1836)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):佐藤るり子

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地が局地的。

概要

翅長46–58mm。山陰には食草がウマノスズクサ、マルバウマノスズクサの2種があり、前種は温帯から暖帯に広く分布しているが、山陰では局地的にしか見られないため、発生地も限られている。南西諸島では成虫が年周見られ、数も多いが、山陰では3化と思われる。飛翔はゆるやかで、アザミ、ネギボウズなど各種の草花で吸蜜する。吸水は確認されていない。卵から蛹まで特異な形をし、幼虫は共食いすることも知られている。蛹で越冬。ウマノスズクサ食のチョウは国内では本種しか生息していなかったが、近年同属のベニモンアゲハが八重山に土着し、またホソオチョウが人為的な放蝶により国内各地で繁殖している。

参考文献

門脇久志 (1976) 隠岐島の昆虫2. 隠岐島の蝶類. すかしば, (6): 3-23.
 高野英明 (2024) 出雲市の神戸川沿いでジャコウアゲハを確認. すかしば, (71): 41.
 尾原和夫 (2017) 斐伊川堤防におけるジャコウアゲハの生活史と個体群動態. ホシザキグリーン財団研究報告, (20): 221-223.
 岡 義人 (1968) [出雲市斐伊川の]ジャコウアゲハの飼育. NECYDALIS, 1(2): 9-10.
 大浜祥治 (2024) 松江市乃木福富町でジャコウアゲハを確認. すかしば, (71): 29.

県内での生息地域・生息環境

ウマノスズクサは堤防などに多く見られる。局所的に分布している多年草のつる草。またマルバウマノスズクサは本県が南限。県内では斐伊川、神戸川、飯梨川、江川、周布川、三隅川、高津川の堤防で本種が発生しているが、飯梨川では河川改良で食草が消滅した。本種は時には大発生することがあり、大山(マルバウマノスズクサ)、飯梨川(ウマノスズクサ)のように食草を食べつくし姿を消すこともある。隠岐諸島でも記録があり、西ノ島美田では美田川の河川敷に繁茂していたマルバウマノスズクサを食していた貴重な個体群が生息していたが、美田ダム建設時に生息環境が失われた。隠岐諸島では島後も含め絶滅した可能性が高い。

存続を脅かす原因

過度な草刈。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

ウラゴマダラシジミ

Artapoetes pryeyi (Murray, 1873)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地が限られ個体数も多くない。

概要

翅長22–24mm。食樹イボタノキがある平地から低山地の落葉広葉樹が優占する林の林縁部を生息環境としている。年1回6月に発生、オスは日中あまり活発ではなく、イボタやウツギなどで吸蜜する。ミドリシジミ属の中には夕方に活発に飛翔する種がいるが本種もその1種。産卵はイボタの枝に産み付けられるが、赤いUFOのような独特の形をしていてよく目立つ。

参考文献

筆谷憲一 (2018) ゼフィルスたちとの出会いを求めて. すかしば, 65-12-16.
 門脇久志 (1976) 隠岐島の昆虫2. 隠岐島の蝶類. すかしば, (6): 3-23.
 久保康彦・横山 隆 (2013) 「珠玉の標本箱 (5) ウラゴマダラシジミ」. 33pp.NRC出版.
 山本正志 (1999) 三瓶山でウラゴマダラシジミを採集. (31): 20.

県内での生息地域・生息環境

浜田市周辺など西部にも生息地はあるが、松江市・出雲市・雲南市・奥出雲町など東部に多く生息地が見られる。各地とも道路拡幅などでイボタを含む雑木林の伐採が進行し生息域が狭められている。隠岐(島後・西ノ島、中ノ島、知夫里島)産は、翅表の黒帯が広くて暗化する地理的変異が見られ、きわめて特異な個体群であり、保全が必要である。

存続を脅かす原因

雑木林の荒廃。隠岐諸島では殺虫剤空中散布。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

ウラキンシジミ

Coreana stygiana (Butler, 1881)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地・個体数共に減少傾向である。

概要

翅長17-19mm。日本特産種。オスの翅裏は暗い金色、メスは明るい金色をしている。コバントネリコやマルバアオダモを食樹とし、低山地では6月中旬ごろ、三瓶山のような高標高地では6月下旬から7月上旬ごろ発生。日中はほとんど飛翔することなく、クリの花などで吸蜜し、まれに吸水する姿も見られる。5時ごろより日没直後には活発に活動する。

参考文献

筆谷憲一 (2018) ゼフィルスたちとの出会いを求めて。すかしば, 65-12-16.
 伊藤 宏 (1986) 三瓶山でウラキンシジミを採集。すかしば, (25): 14.
 和泉浩行 (1985) 赤来町でウラキンシジミを採集。すかしば, (24): 7.
 門脇久志 (1976) 隠岐島の昆虫2。隠岐島の蝶類。すかしば, (6): 3-23.
 三島昭一 (2012) 船通山でウラキンシジミ幼虫パラシュート発見。すかしば, (59): 17.

県内での生息地域・生息環境

県東部県境付近の低山地で1997年確認しているが、道路拡張、新設などで環境も悪くなり、現在でも生息しているか不明。呑谷でも1986年の記録がある。船通山、三瓶山、奥出雲町など山地の渓谷沿いや落葉樹林周辺では、現在でも確認されている。隠岐(島後・西ノ島)にも生息しており、特異な個体群であるが、松枯れ対策の殺虫剤空中散布の影響を受けて激減している。

存続を脅かす原因

雑木林の興廃。隠岐諸島では殺虫剤の空中散布。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

ヒサマツミドリシジミ

Chrysozephyrus hisamatsusanus (Nagami et Ishiga, 1935)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地が限定され個体数も減少傾向。

概要

翅長18mm前後。日本特産種。ミドリシジミの中で後翅の白帯がV字状になっているのは本種のみ。食樹ウラジロガシのある渓谷沿いで6月中旬ごろより発生する。オスは山頂付近で多く見られ、晴天の日中にかけて活動する。メスは活発に活動することはないが、10月ごろまで生存し、ウラジロガシの頂芽辺りの休眠芽に産卵する。鳥取市の久松山が基準標本産地で、和名は訓読みしたもの。

参考文献

青戸 賢 (1973) ヒサマツミドリシジミを内尾谷で採集。Longicorn, (5): 12.
 中村泰士 (1969) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて。すかしば, (4): 3-5.
 新海義春 (2004) ヒサマツミドリシジミの採集記録。わたしたちの自然史, (88): 22.
 上田常一 (1964) 山陰の珍チョウ。『山陰の動物誌』: 121-129。松江今井書店。
 安田正利 (1989) 島根県鹿足郡柿木村でヒサマツミドリシジミ卵を採卵。蝶州, (3): 7.

県内での生息地域・生息環境

匹見峡、奥出雲町(旧仁多町)に産地が知られていたが、近年、調査精度が上がり、浜田市(旧金城町、旧旭町)、邑南町(旧瑞穂町、旧石見町)、津和野町、吉賀町(旧柿木村)、大万木山、安来市からも卵、成虫確認の報告がある。奥出雲町(旧仁多町)では、落葉樹と常緑樹が混成している渓谷で、道路付近にも産卵木が見られる。現在、伐採や遷移が進み生息環境が著しく悪化している。

存続を脅かす原因

ウラジロガシの混じる自然度の高い広葉樹林帯の伐採。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

キリシマミドリシジミ

Therozephyrus ataxus (Westwood, 1851)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地も限定され個体数も少ない。

概要

翅長20–21mm。山地帯でアカガシが多く見られる照葉樹林に7月下旬から8月に発生する。メスの翅裏地色は茶褐色、樹林内の葉上で静止していることが多く、活発に活動することないが、気温が高いときには、地上で吸水もする。オスの翅裏地色は銀白色、表には綺麗に輝く金緑色があり、午前11時ごろより3時過ぎまで、渓谷の斜面や樹林内でもテリトリーを張り活発に活動、交尾もこの時間帯に行われる。

参考文献

門脇久志 (1976) 隠岐島の昆虫2. 隠岐島の蝶類. すかしば, (6): 3-23.
淀江賢一郎 (1976) 隠岐島産キリシマミドリシジミの生活史. すかしば, (6): 24-27.
淀江賢一郎 (1981) 島根県からキリシマミドリシジミを発見する. すかしば, (15): 16.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では1975年に発見され、1981年に淀江賢一郎氏が津和野町で発見した。さらには未公表ながら吉賀町(旧柿木村)でも発見されている。隠岐(島後)では、ルーミスジミと混生しているが、大規模伐採や杉の植林で大きなアカガシ林が減少傾向にあり、さらに1990年代の大型林道造成工事が拍車をかけ憂慮すべき状態になっている。

存続を脅かす原因

林道建設、植林などによるアカガシ林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

ウラジロミドリシジミ

Favonius saphirinus (Staudinger, 1887)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

産地も限られ個体数も少ない。

概要

翅長17–19mm。ゼフィルスの中でもファボニウスと言われる、オスの翅表が青緑色に輝く一群の仲間、裏面が銀白色しているのがこの名がある。年1回6月にナラガシワ林に発生する。同じ食樹であるヒロオビミドリシジミと混生するところも多いが、県東部低山地の小規模なナラガシワ林では本種のみ発生している。

参考文献

筆谷憲一 (2018) ゼフィルスたちとの出会いを求めて. すかしば, (65): 12-16.
門脇久志 (1976) 隠岐島の昆虫2. 隠岐島の蝶類. すかしば, (6): 3-23.
森山正治 (1957) 島根県内にウラジロミドリシジミの新産地. 新昆虫, 10(11): 47-48.
岡 義人 (1969) 出雲市産蝶類目録II. 自刊, 8pp.
山本正志 (2006) 島根県中部地域(江の川流域)におけるゼフィルスの採集報告. すかしば, (54): 41-43.

県内での生息地域・生息環境

東部、西部にナラガシワ林が点在するが、開発改修、道路拡張、椎茸のホダ木にと伐採されることが多く、また、林周辺に存在する所では、放置されて他の樹木に覆い隠されそうになるほど、樹種変換がゆっくりと進行し、本種の存在が数年後には危ぶまれるほど不安定な環境下にある。また、隠岐(島後)では、海岸近くにある小規模なカシワ林に生息が確認されており、きわめて特異な個体群で特別な保全対策が必要である。

存続を脅かす原因

カシワやナラガシワを含む雑木林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

ハヤシミドリシジミ

Favonius ultramarinus (Fixsen, 1887)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

カシワに依存しているため、産地も限定され個体数も少ない。タイプ標本基産地。

概要

翅長20-22mm。オスの翅表が青緑色に輝くファボニウスと呼ばれる一群の仲間で、6月下旬から7月上旬の短い期間に出現。標高400m以上の山地のカシワ林が生息地。日中はカシワの葉陰に潜んでいることが多く、朝方や夕方に活動。特に早朝には下草に降りている個体をよく見かけることもある。産卵は大木では下枝の1年枝上に、ヒコバエには好んで産卵し、林から離れた草地に孤立している若木にも多数の卵が見られることもある。

参考文献

白水 隆 (1952) 日本産ミドリシジミ類の一新種 [ハヤシミドリシジミ, 北海道・青森・長野・東京・島根]。昆虫, 19(2): 60-66, pl. 5.
淀江賢一郎 (1978) 三瓶山の蝶類 (1)。すかしば, (10): 37-47.

県内での生息地域・生息環境

県内で確認されているのは三瓶山、大佐山、吾妻山の3カ所。三瓶山では山頂部や室の内は特別保護区として保全され良好であるが、個体数は多くない。他所は道路ができたり、近くにスキー場ができたりで、荒廃している。

存続を脅かす原因

県内にカシワ林があまり多くなく、三瓶山以外では、他所は道路ができたり、近くにスキー場ができたりして、著しく荒廃している。

(執筆: 淀江 賢一郎)

昆虫類

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

エゾミドリシジミ

Favonius jezoensis (Matsumura, 1915)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

局地的で、生息地も限定される。

概要

翅長18-21mm。食樹ミズナラが、中国地方では標高600m以上の山地に限られるため、発生地も限定されている。6月下旬から7月上旬ごろに出現するが、同じ食樹のジョウザンミドリシジミ、アイノミドリシジミと混成している場所も多く、時間的な棲み分けをしている。早朝にも見られることもあるが、午後からの活動がおもになり、晴天時には午後から夕方にかけて、なわばりをつくり、活発に飛翔する。曇天時は活動時間が早くなる傾向がある。産卵は太枝、樹幹などに行う。

参考文献

久保田直哉 (1987) 隠岐諸島・島後でエゾミドリシジミを発見。すかしば, (27): 16.
淀江賢一郎 (1978) 三瓶山の蝶類 (1)。すかしば, (10): 37-47.

県内での生息地域・生息環境

県内では船通山、大万木山、三瓶山、益田市匹見町、隠岐(島後)などに記録がある。隠岐(島後)の山地ミズナラ林に生息する本種はきわめて特異な地域個体群であり、特別な保全対策が必要である(久保田直哉氏が発見)。

存続を脅かす原因

林道開発などによるミズナラを含む落葉広葉樹林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

クロミドリシジミ

Favonius yuasai Shirozu, 1947

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

産地が局限され、個体数も少ない。

概要

翅長19—21mm。翅の表が黒褐色で緑色をしないミドリシジミ。クヌギ、アベマキの大木がある林に発生するが、自然林より人家周辺の二次林を好むようで、しかも若木のみ林では見られず、ある程度古木が存在する林に発生し、また、特定の木に偏って見られる傾向がある。活動は夜明け前の暗いうちに始まり、明るくなるころには活動が終わっている。昼間は樹葉上にいることが多いが、夕方には再び活動を始める。終令幼虫は、一般には樹の根際に降りてくる習性が知られているが、本県では高所にとどまるという特徴がある。

参考文献

後藤和夫・田中正文(1989) クロミドリシジミの新分布地。山口県の自然, 5(9): 45-46.
 和泉浩行(1988) 赤来町の蝶類-赤名・谷地区を中心にして-。すかしば, (29): 1-6.
 三島昭一(1988) 三瓶山でクロミドリシジミ幼虫を採集。すかしば, (30): 53.
 三宅誠治(2007) 中国地方のクロミドリシジミ。月刊むし, (437): 42-47.
 柳橋浩一(1987) 三瓶山でクロミドリシジミを採集。蝶州, (1): 25.

県内での生息地域・生息環境

西部(旧・六日市町)で1968年初発見(能見豪氏)。以後、吉賀町(旧柿木村)、津和野町などで確認されており、東部でも三瓶山、飯南町(旧赤来町、旧頓原町)などから発見された。大木を含むクヌギ林は県内にはごく少なく、発生数も少ない。

存続を脅かす原因

クヌギの古木を含む自然度の高い雑木林の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

フジミドリシジミ

Sibatanocephyrus fujisanus (Matsumura, 1910)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

生息地が限られ、個体数も少ない。

概要

翅長16—18mm。日本特産種(近似種が近年、台湾や中国奥地で発見された)。標高600m以上のブナ林に生息。年1回6月に出現するが、樹上で生活しているため発見しにくい。

参考文献

中村泰士(1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて-。すかしば, (4): 3-5.
 山本正志(1992) 島根県仁多郡横田町] 船通山でフジミドリシジミを採集。すかしば, (18): 27.

県内での生息地域・生息環境

強風の翌朝にブナ林の下草によく降り、気温の高い日には吸水にも降りてくるので、こんなときには発見しやすい。標高の高い地で発生が早いのは、ブナの芽ぶきが早く伸展も早いから、食樹に合わせて幼虫の成長も早いからである。

存続を脅かす原因

温帯落葉樹林に自生するブナ林は、県内には多くなく、現存する規模も小さいので、今後そのブナ林の保全が重要である。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目シジミチョウ科

スギタニルリシジミ

Celastrina sugitanii Matsumura, 1919

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

生息地が限定され、個体数も少ない。

概要

翅長12-15mm。北海道、本州、四国、九州に分布。年1回、4月中旬ごろに出現。トチノキの見られる山間樹林の渓谷で発生、よく晴れた暖かい日に活動し、オスはよく地上や溪流の岩場で吸水、時には集団にもなる。メスは近くのワサビなどに訪花する。ルリシジミと混生するため紛らわしいが、本種は翅の色が灰白色で暗く、また斑紋の構成で識別できる。孵化した幼虫はトチノキの花、つぼみを食して成長する。県内ではミズキなどでは確認されてない。

参考文献

三島秀夫 (2001) 三瓶山でスギタニルリシジミを採集。すかしば, (49): 86.
 三島昭一 (2007) スギタニルリシジミを島根県赤来町で採集。すかしば, (55): 34-35.
 三島昭一 (2015) スギタニルリシジミを奥出雲町猿政山で採集する。すかしば, (62): 7.
 中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて。すかしば, (4): 3-5.
 山本正志 (1976) 横田町でスギタニルリシジミを採集。すかしば, (6): 29.

県内での生息地域・生息環境

県内では匹見峡、船通山など局地的に生息しているが、近年、三瓶山、奥出雲町呑谷からも記録がある。船通山は渓谷沿いが急斜面になり、山頂部のカタクリも保護されているため、開発しにくい状況にあり環境は良い。

存続を脅かす原因

トチノキの混じる自然度の高い落葉広葉樹林の大規模な伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

昆虫類

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目タテハチョウ科

メスグロヒョウモン

Damora sagana liane (Fruhstorfer, 1907)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

1970年代には普通に見られたが、1990年代より減少傾向にある。

概要

翅長35-40mm。オスは他のヒョウモン類と似た色模様しているが、メスは地色が黒褐色でイチモンジチョウに似た色模様をし、別種のように見える。低山地の雑木林や二次林周辺に6月中旬ごろ現われ、各種の花を訪れたり、地上で吸水したりするが、盛夏には夏眠し秋再び現われ、木の幹など食草から離れた所に産卵、1令幼虫で越冬すると言われる。食草はスミレ類。

参考文献

淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志 (2006) 島根県の蝶類-島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245. 日本生物教育会島根大会実行委員会.

県内での生息地域・生息環境

低山地の雑木林の林縁などが主要生息地。ウツギ、クリ、ノアザミ、オカトラノオなどに訪花するのが観察されている。隠岐諸島でも以前のように多く見られることがない。秋季見られる越夏個体は人家周辺の草花で吸蜜するので発見されやすい。

存続を脅かす原因

雑木林周辺(林縁)の手入れ不足による草地の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目タテハチョウ科

イチモンジチョウ隠岐諸島亜種

Limenitis camilla yuzurikai Ooya et Yamamoto, 2026

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 淀江賢一郎



■ 選定理由

隠岐諸島(島後)に生息する本種が新亜種に記載され、乱獲によって個体数減少の恐れが高い。

■ 概要

翅長26—33mm。イチモンジチョウの仲間は朝鮮半島、ロシア沿海州に多い。国内にはアサマイチモンジとイチモンジチョウの2種が生息。イチモンジチョウは各地で地理的変異が著しく、例えば、岩手県陸中産、新潟県長岡市産などが有名。隠岐諸島(島後)産の個体群も40年以上前から顕著な地理的変異が知られていたが、2025年になって新亜種とされるにいたった。

● 参考文献

藤岡知夫(1975) 日本産蝶類大図鑑。講談社。

門脇久志(1976) 隠岐島の昆虫2。隠岐島の蝶類。すかしば。(6): 3-23。

大屋厚夫・山本修成(2025) 隠岐諸島のイチモンジチョウ新亜種の記載-A new subspecies of *Limenitis Camilla* (Linnaeus, 1764) from Oki Islands, Shimane, Japan. 月刊むし。(648): 23-26。

■ 県内での生息地域・生息環境

明るい林縁沿いで食草スイカズラ周辺を飛び交う個体がよく観察される。食草があれば海岸線沿いでも生息している。年2回、5—6月と8月に発生する。

■ 存続を脅かす原因

2025年2月に新亜種として記載された。亜種まで蒐集するコレクターによって乱獲が続く恐れがある。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目タテハチョウ科

アサマイチモンジ

Limenitis glorifica Fruhstorfer, 1909

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 佐藤るり子



■ 選定理由

近年産地、個体数が減少傾向にある。

■ 概要

翅長25—36mm。日本固有種で本州のみに生息。スイカズラやタニウツギなどを食草に、年2回5—6月と8月に発生し樹林周辺で見かける。良く似たイチモンジチョウと混生している場所もあるが、白斑の違いなどで識別できる。発生場所にある花を訪れたり、吸水したりする。幼虫で越冬する。

● 参考文献

岡田雅裕(1952) アサマイチモンジとシルビアシジミ。昆虫石見。(2): 13-14。

淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志(2006) 島根県の蝶類-島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245。日本生物教育会島根大会実行委員会。

■ 県内での生息地域・生息環境

低山地から山地にかけて生息しているが、良好だった産地も放置されてクズなどが辺りを覆い、衰亡している所が多い。県東部の観察では、遷移による環境の悪化のせいか、よく見られた三瓶山や奥出雲町(旧・仁多町)も、一時まったく見られなくなった年もあったが、近年少ないながら復活した。隠岐諸島からは未記録である。

■ 存続を脅かす原因

開発や、遷移の進行、林縁の手入れ不足による荒廃など。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

チョウ目タテハチョウ科

ホシミスジ隠岐諸島亜種

Neptis pryri yodoi Fujioka, 1998

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 淀江賢一郎

島根県固有評価

島根県固有亜種、基準標本産地

環境省カテゴリー

—



選定理由

本種は隠岐諸島だけに生息する個体群で、近年減少傾向である。

概要

翅長26—32mm。海岸部でミツバユウガサが見られる林縁の明るい場所に年1回6月に出現(例外的に2化)、ゆるやかに飛翔しウツギなどに訪花する。8月には食草の一部を綴って巣を作り越冬する。前翅2室の白斑が横に大きく、後翅白斑列が三日月形になるなど顕著な地理的変異が見られ、隠岐諸島の個体群は固有の亜種(*ssp.yodoi*)として1998年に記載された。

参考文献

藤岡知夫(1998)世界のホシミスジの地理変異-2新亜種の記載を含む-。ホシザキグリーン財団研究報告,(2):263-274。
福田晴男・美ノ谷憲久(2017)日本と世界のホシミスジ。月刊むし社。
木村正明(1989)隠岐のホシミスジの分布とその食餌植物について。NEPTIS,(2):23-26。

県内での生息地域・生息環境

隠岐(島後、西ノ島、中ノ島、知夫里島)ではおもに海岸部の崖や河川下流域の崖地、道路沿いの崖地が生息地になっている。食樹ミツバユウガサが西日のよくあたる崖地に生育しているため、本種も山奥よりも海岸近くに多く見られる。本亜種は特異な地域個体群であり保全が必要である。

存続を脅かす原因

道路開発(道路拡幅や古い露岩地のコンクリート吹き付けなど)。殺虫剤空中散布。

(執筆: 淀江 賢一郎)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目アナバチ科

ヤマトスナハキバチ

Bembecinus hungaricus japonicus (Sonan, 1934)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 郷右近勝夫

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



選定理由

典型的な海浜性のカリバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系の喪失で、生息密度が激減している。

概要

体長はメスが10—11mm、オスが9—10mm。小型のアナバチである。全体が黒色を呈し、腹部の1~3節板後縁に淡黄色の横縞がある。年1化性で、活動期間は7月上旬から9月下旬である。幼虫餌として、同翅亜目の成虫を狩る。砂地に穿孔し、緩やかに下降した坑道(坑道長:2.5—9cm)の先端に1個だけ育房を作製する単育房制で、育房内に砂粒の台座を作り、その上に卵を垂直に産下する。最初の貯食は、産卵後しばらく経って行われる。随時給食制で、給餌は育房口をそのつど開閉して行われる。越冬は、育房内の繭中において前蛹態で行う。北海道から屋久島まで広く分布する。

参考文献

林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵(2015)隠岐諸島における昆虫類分布調査IV。ホシザキグリーン財団研究報告,(18):179-196。
岩田久二雄(1975)穴蜂科での空室産卵の発見:ペンビキヌスの生活の観察。「自然観察者の手記」,565+19 pp.(245-262);(253-257)。朝日新聞社,東京。
前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一(2004)海浜における送粉生態系の保全に関する研究。ホシザキグリーン財団研究報告,(7):275-303。
皆木宏明・前田泰生・北村憲二(2000)海浜における送粉生態系の保全に関する研究。1. 大社砂丘における訪花昆虫の種類とそれらの季節消長。ホシザキグリーン財団研究報告,(4):139-160。

県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)のほか隠岐島後で局所的に採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

(執筆: 前田 泰生)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目スズメバチ科

キオビホオナガスズメバチ本州亜種

Dolichovespula media sugare Ishikawa, 1969

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)

撮影者(提供者): 皆木宏明



■ 選定理由

近年、中国地方の山岳地帯でも生息が確認された。生息密度は低く、分布の南限にあたる。

■ 概要

真社会性種で、女王はキイロスズメバチに擬態している。働きバチの腹部斑紋の変異は多様で、「五目蜂」と称される。体長は女王が19–22mm、働きバチが14–19mm、オスが19mm前後である。巣房を樹幹の小枝にぶらさげる。スズメバチ類のなかでは、コロニーのサイズは最小である。年1化性で、秋期に出現した次世代の女王とオスが交尾し、受精後に女王だけが朽木などに穿孔して越冬する。国内では、本州中部以北の山岳地帯では豊産する。原亜種は (*D. m. media* (Retzius))、旧大陸のほか北海道にも産する。

● 参考文献

前田泰生・手塚俊行 (1995) キオビホオナガスズメバチの新分布地。中国昆虫, (9): 31.
前田泰生・郷原匡史・郷右近勝夫 (2022) 中国地方における有刺類4種の分布新記録。中国昆虫, (15): 39-43.
松浦 誠 (1995) 社会性カリバチの生態と進化。北海道大学図書出版会, 353 pp.札幌。
松浦 誠・山根正気 (1984) スズメバチ類の比較生態学。北海道大学図書出版会, 428 pp.札幌。

■ 県内での生息地域・生息環境

大万木山、安蔵寺山で局所的に採集されている。邑智郡川本町の国有林と三瓶山で巣が発見されている。豊かな自然林が残された山岳地帯だけに生息している。

■ 存続を脅かす原因

豊かな自然林の喪失。

(執筆: 前田 泰生)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目ハキリバチ科

ホシトガリハナバチ

Coelioxys formosicola Strand, 1913

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 前田泰生



■ 選定理由

典型的な海浜性のハナバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系が喪失し、生息密度の維持が危惧される。

■ 概要

体長はメスが8–12mm、オスが7–12mmで、雌雄とも胸部の背面に目立つ4つの白斑がある。キヌゲハキリバチの労働寄生蜂である。寄生様式は「空き巣ねらい型」で、寄主の留守中に育房内に侵入して、貯めかけの花粉団子中に数卵を産下する。活動期間は、寄主と同じである。部分的2化性で、寄生した寄主の育房内において前蛹態で越冬する。海浜周辺で生育するコマツナギ、ハギ類のほか海浜性のハマグルマをよく訪花する。国内の分布域は、寄主のそれと同一である。

● 参考文献

前田泰生・皆木宏明 (1999) キヌゲハキリバチの巣の構造。ホシザキグリーン財団研究報告, (3): 165-172.
前田泰生・佐々木陽一 (2018) ハナバチ類における労働寄生蜂の寄生様式と寄生率。ホシザキグリーン財団研究報告, (21): 169-197
Maeta, Y., K. Goukon, R. Miyanaga (2015) Revised species names of Japanese cleptoparasitic bees and their hosts, with additional new host records (Hymenoptera: Apoidea). *Jap. J. Syst. Ent.*, 21: 299-303.

■ 県内での生息地域・生息環境

県内の海浜では、ハマゴウの生育が良好であれば、寄主ともども普遍的に生息する。

■ 存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

(執筆: 前田 泰生)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目ハキリバチ科

キヌゲハキリバチ

Megachile kobensis Cockerell, 1918

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮永龍一



選定理由

典型的な海浜性のハナバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系の喪失で、生息密度の維持が危惧される。ハマゴウの重要な送粉者である。日本固有種。

概要

体長はメスが9-11mm、オスが8-10mmで、体全体が白毛で覆われた中型のハキリバチである。部分的2化性で、越冬は育房内において前蛹態で行う。活動期間は、大社砂丘では6月中旬から9月中旬までの3カ月間にも及ぶ。広食性種であるが、ハマゴウのスペシャリスト的な送粉者である。砂地に緩やかに傾斜した単坑を掘り(深さ2-7cm)、その先端に1-3個の育房を直列に配置する。育房は葉片で作製される。国内では、本州・四国・九州に分布する。

参考文献

郷原匡史(1993) キヌゲハキリバチに関する若干の生態的知見. 中国昆虫, (7): 29-34.
岩田久二雄(1941) 日本内地産葉切蜂六種の習性考察. 高津中学校編「紀元2600年記念高津中学校記念論文集」: 223-248.
前田泰生・皆木宏明(1999) キヌゲハキリバチの巣の構造. ホシザキグリーン財団研究報告, (3): 165-172.
前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一(2004) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究. 2. 山陰地方の海浜性植物ハマゴウ(クマツヅラ科)における有刺類の送粉様式. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 275-303.
皆木宏明・前田泰生・北村憲二(2000) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究. 1. 大社砂丘における訪花昆虫の種類とそれらの季節消長. ホシザキグリーン財団研究報告, (4): 139-160.

県内での生息地域・生息環境

県内の海浜では、ハマゴウの生育が良好であれば普遍的に生息する。汀線から離れた堆砂垣周辺の砂丘内で営巣する。

存続を脅かす原因

海浜生態系の破壊。

(執筆: 前田 泰生)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目ハキリバチ科

ネジロハキリバチ

Megachile disjunctiformis Cockerell, 1911

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):前田泰生



選定理由

準海浜性のハナバチで、国内では局所的に採集されている。

概要

体長はメスが15-18mm、オスが12-14mm。中型のハキリバチである。全体が黒色を呈し、前伸腹節と腹部の1節背板に白毛が密生する。年1化性で、活動期間は7月下旬から9月下旬である。典型的な広食性で、大社砂丘周辺ではハギ類でよく採集される。また、海浜のハマゴウでもしばしば採集される。営巣は、海浜周辺のブドウ用ビニールハウスで使用されるフレーム管の内部を利用して行われていると推測される。育房は樹脂を用いて作製される。なぜ、海浜を好んで生息するのか不明である。国内では、本州から南西諸島の西表島まで広く分布する。国外では、台湾・中国・朝鮮半島にも産す。

参考文献

岩田久二雄(1975) タマリンドウとネジロハキリバチ. 「自然観察者の手記-昆虫とともに五十年」, 565+18 pp. (187-191). 朝日新聞社. 東京.
川村 満(1951) ネジロハキリバチ (*Megachile disjunctiformis*) の習性. 新昆虫, 4: 15-17.
前田泰生・杉浦直人(1988) 山陰地方のハナバチ相 (I) ハキリバチ科. すかしば, (30): 1-10.
皆木宏明・前田泰生・北村憲二(2000) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究. 1. 大社砂丘における訪花昆虫の種類とそれらの季節消長. ホシザキグリーン財団研究報告, (4): 139-160.
三木孝人(2019) 出雲市内でネジロハキリバチを採集. すかしば, (66): 29.

県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)のほか内陸部の出雲市白枝町と松江市西川津町で採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

(執筆: 前田 泰生)

準絶滅危惧 (NT)

ハチ目ミツバチ科

シロスジコシブトハナバチ

Amegilla quadrifasciata (Villers, 1789)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):皆木宏明



■ 選定理由

準海浜性のハナバチで、国内では採集個体数が少ない。

■ 概要

体長はメスが15-17mm、オスが13-14mmで、がっしりした体躯をもつ。腹部の1~4節背板後縁に白毛帯がある。名前はこの特徴に由来する。稀種のため、生態に関する知見は皆無に近い。年1化性で、活動期間は7月下旬から9月中旬までである。典型的な広食性で、海浜ではハマゴウの花でしばしば採集される。営巣地は、海浜に流れ込む大小河川脇の切り通しの砂壁と推測される。内陸部でも、営巣地は砂壁であろう。国内では、本州・四国・九州から分布記録がある。国外では、旧大陸にも産する。

● 参考文献

前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一 (2004) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 275-303.
皆木宏明・前田泰生・北村憲二 (2000) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究. 1. 大社砂丘における訪花昆虫の種類とそれらの季節消長. ホシザキグリーン財団研究報告, (4): 139-160.
宮永龍一・清水加那・井上くるみ (2022) 海浜性植物ハマゴウの訪花ハナバチ相と周辺環境との関係について. 中国昆虫, (35): 1-9.

■ 県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)のほか島根県内の数カ所の砂丘、ほかにも三瓶山でも局所的に採集されている。

■ 存続を脅かす原因

特異な環境に営巣するので、このような環境の喪失は生息を不可にする。

(執筆者: 前田 泰生)

情報不足 (DD)

トンボ目サナエトンボ科

オグマサナエ

Trigomphus ogumai Asahina, 1949

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):北山拓



■ 選定理由

県中西部において産地が局限される。かつて広く分布していた県東部の平野部においても産地・個体数が減少傾向である。

■ 概要

全長46-52mmのやや小型のサナエトンボ。県内に生息するコサナ工属3種の中では最も大きく、また幼虫は腹部先端の第10節がきわめて長く特徴的である。羽化は4月中旬ごろから始まり、羽化後は周辺の雑木林などへ分散する。成熟した雄は水辺に静止して縄張りを張る。産卵は雌単独で、水際の草地の上をホバリングし、腹端を振りながら卵をばらまく。

● 参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
宮本昭子 (2024) 益田市と近隣におけるコサナ工属の記録. すかしば, 71:73-75.
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ. ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.

■ 県内での生息地域・生息環境

平地~丘陵地の開放的でやや水深の深い池沼に生息するが、内陸部ではまれとなる。県東部では比較的普通に見られるが、中西部では産地が局限される。隠岐諸島では未記録。

■ 存続を脅かす原因

開発などによる生息池沼の埋め立てや、休憩場所となる周辺雑木林の伐採など。

(執筆者: 大浜 祥治)